

俳句の街 まつやま
俳句ポスト365
作品集2017

<http://haikutown.jp/>



目次

季語解説



第139回 雉きじ …… 1

〈春〉キジ科の鳥で日本の国鳥。草原や雑木林などに棲む。春に雄が雌を呼ぶ声を放つことから春の季語とされているが、留鳥である。

第140回 馬鈴薯じゃがいも植う …… 2

〈春〉芽の出るところを外さないように2〜4つに切り分けた馬鈴薯の種芋を、畑の畝に40〜50cmの間隔で、芽の出る方を上に向けて植える。北海道では「馬鈴薯蒔く」ともいう。

第141回 貝寄風かいよせ …… 3

〈春〉陰暦2月20日前後に吹く西風。大阪の四天王寺の聖霊会の舞台に立てる供養の造花を、古くはこの風によつて住吉の浜に吹き寄せられた貝殻で作ったという。「貝寄」の語は他の各地にもある。

第142回 海胆うに …… 4

〈春〉棘皮動物ウニ綱の総称。海底の砂中や岩礁などに生息する。円盤状や球状をしており、棘栗にも似た無数の長い棘を持っている。

第143回 菜種梅雨なねづめ …… 6

〈春〉3月末〜4月にかけて、連日降る長雨のこと。菜の花の咲く頃の長

雨であることからの呼び名。

第144回 鮎すし …… 7

〈夏〉かつては魚などを発酵させる馴鮎なすしを言つたが、時代と共に現代のような、酢飯に魚介類などを添えるものへと変遷していった。酢が防腐の役目を果たし、また食欲を増進させることから夏の季語になったとされる。

第145回 蜜柑の花みかんはな …… 9

〈夏〉一般的に「蜜柑」といえば温州蜜柑しゅうじのことで、主に西日本の暖地で栽培される。5〜6月頃に白色五弁の小さい花が細かく咲き溢れ、甘くて強い芳香を漂わせる。

第146回 蜻蛉生るとんぼうま …… 9

〈夏〉蜻蛉の幼虫は「やご」といわれ、水中で数ヶ月〜1,2年を過ごす。このやごが羽化し、成虫になることをいう。

第147回 いきぶり …… 10

〈夏〉ゴキブリ目に属する昆虫の総称。油虫。体は扁平で幅広、触覚は糸状で長い。夏になると台所などに出て人に嫌われる。「御器嘔り」が転じた名だとされている。

第148回 冷麦 ひやむぎ …… 12

〈夏〉原料は小麦粉で、作り方はうどんと同じだが、うどんより細く、また素麺よりは少し太い。茹でて冷やし、様々な薬味を添えて、濃いめの麺つゆで食べる。

第149回 月見草 つきみ草 …… 13

〈夏〉アカバナ科の越年草。北アメリカ原産で、19世紀半ばは日本に渡来した。夕方、細い茎に白色の四弁の花を開き、朝方には閉じる。野生化はせず園芸用として栽培されている。待宵草のことを呼ぶ場合もあるが、本来は別種である。

第150回 五月雨 さみだれ …… 14

〈夏〉陰暦5月（現在の6月頃）に降り続く長雨。長雨は梅雨の時季であることによるものだが、「梅雨」がその時候を含めていうのに対し、「五月雨」は雨そのものを指している。

第151回 鵲の贄 もず にえ …… 15

〈秋〉肉食の小鳥である鵲が、その習性として、捕らえた虫や、蛙、蜥蜴などの小動物を木の枝などに刺しておいたもの。鵲がそれを後から食べることはまれで、刺されたまま干涸びるなどしている。

第152回 啄木鳥 きつづき …… 17

〈秋〉キツツキ科の鳥の総称。留鳥だが秋の季語とされる。「けら」とも呼ばれ、色や形状、大きさなどで分類される様々な種類がいる。木に棲む虫を捕食したり、また巣を作ったりするために嘴で木をつつく。

第153回 胡麻 ごま …… 18

〈秋〉ゴマ科の一年生作物。晩夏に花を咲かせた後、9月頃に実が熟し、やがてははじけて中の種子を飛ばす。食用には実がはじける前に刈り採り、束ねて干してから、樽の内側などで叩いてはじけた種子を採る。

第154回 秋薊 あきあざみ …… 19

〈秋〉キク科の多年草である薊には多くの種類があり、そのうち「山薊」「南部薊」「真薊」など、秋に花をつけるものの総称をいう。単に「薊」と言った場合は春の季語となる。

第155回 湿地茸 しめじ …… 20

〈秋〉食用きのことして一般的。キシメジ科のほんしめじは、径4〜10cmで傘は茶色から灰色をしており、柄は7〜10cmの白色。秋に小櫓林や赤松との混生林に生え、上品な旨味、歯切れの良さなどが絶品。

第156回 蘆刈 あしかり …… 22

〈秋〉晩秋から初冬にかけて、水辺の枯れ蘆を刈り取ることを、また蘆を刈り取る人のことをいう。刈り取った蘆で蓆簀を編んだり、かつては屋根を葺くのにも用いられた。

第157回 波郷忌 はきょう忌 …… 23

〈冬〉11月21日。昭和44年のこの日に56歳で亡くなった、石田波郷の忌日。大正2年（1913年）3月18日愛媛県生まれ。「忍冬忌」「風鶴忌」「惜命忌」とも呼ばれる。

第158回 風邪 かぜ …… 24

〈冬〉寒風にさらされたり、寝冷えをしたことがきっかけで引く風邪や、ウイルスによる流行性感冒などがある。くしゃみ、鼻水、咳、のどの痛み、熱などの諸症状を伴い、重症化することもある。

第159回 毛布 もうふ …… 25

〈冬〉動物の毛や化学繊維で織った防寒用の布。主に寝具として用いる。布の間に電熱線を通した電気毛布などもある。

第160回 熊 くま …… 27

〈冬〉日本の山野に生息するものの中

では代表的な猛獣。本州以南ではツキノクグマ、北海道ではヒグマ、月輪熊。北海道では熊が生息する。

第161回 鷹狩 たかがり …… 28

〈冬〉じゅうぶんに飼慣らした鷹を空中に放つて、鳥を捕らえる狩り。主に大鷹や隼が使われた。公家や武家のあいだで古くから盛んに行われており、江戸時代に最も隆盛をきわめた。

第162回 山焼 やまやき …… 30

〈春〉枯木・枯草を焼いた灰を肥料として牛馬の飼料となる青草を生やしたり、害虫を駆除したりするために、早春の晴天無風の日に、野山の枯れた草木を焼き払う。

第163回 蜂 はち …… 31

〈春〉アリ類以外のハチ目の昆虫の総称。昆虫の中でも最も繁栄していて、様々な種類が存在するが、日本で主に人目につくものは、足長蜂、雀蜂、熊蜂、蜜蜂などである。

出張俳句ポスト報告 …… 表5

365オプ会報告 …… 表6

雉

天

雉鳴けりこれより雪の無き林

井上じろ

季重なりはタブーではなく高度なテクニクであるといつもいつてますが、この句はまさに季重なりの逸品。特に上五「雉鳴けり」からの展開が巧い作品です。

「雉」は春の季語ですから、上五「雉鳴けり」によって読者の脳内には麗かな春の野山で鳴く雉の声、あるいは雉の姿が浮かんでくるわけですが、中七「これより」からの光景の立ち上がりがなんとも鮮やか。「これより」広がっているのが「雪の無き林」であるよ、というわけですから、作者はここまでは残雪の道を歩いてきたことが分かります。雪の残る山道を歩いている途中、繁みから出てきた「雉」に会ったのかもしれない。繁みの中に消えていく「雉」の尾を見たのかもしれない。背後の山から聞こえてくる「雉」の声は、あの雉かもしれないと思いつつながら山を下りてきたのでしょうか。

今、眼前に広がっているのは早春の林。「これより雪の無き林」という措辞は、越えてきた山道の残雪を想起するとともに、まだ冷たい空気の中で鳴く「雉」の声をありありと再生させます。たった十七音の俳句は、季語と型の力をかりて、ここまでの映像喚起力を持ち得る文芸なのです。

地

雉低くよぎつて空港まで5キロ

カリメモ

いきなり出現した「雉」に驚くシーンから始まります。「雉」は飛ぶよりも歩くことが得意な鳥ですが、「雉低くよぎつて」という措辞でその特徴がよく描写されています。

さらに、後半の措辞「空港まで5キロ」によって光景がぐんと広がり、作者は車内にてハンドルの握っているのかもしれない、市街からは離れた山中を切り開いて造られた「空港」にちがいないと、一句の世界がどんどん明確になっていくのも、この作品の持つ力。これも「天」に推したかった作品です。

雉子鳴くや給水塔の光るなり

かをり

「雉鳴くや」という上五と「給水塔の光るなり」という中七下五とは直接意味の上では関係がないのですが、このように取り合わせられることによって光景が生きていきまします。

作者は「給水塔」が眼下にみえる丘の上にいるのでしょうか。「雉鳴くや」の春の声に呼応するように、春の風が光り、春の日差しが「給水塔」を光らせまします。

父の手に仕留めた雉の垂れにけり

いもとやへえ

映像の作り方が巧い作品です。「父」という人物、「手」という部位へのクローズアップ。中七「仕留めた」で、狩?を想像させる一語の選択も巧みです。さらに、最も誉めるべきは下五「垂れにけり」という描写。ぐんなりと「父の手」にある「雉」の長い尾が読み手の脳裏にありありと再生されまします。

吊られたる雉蒼蒼と腥し

くらげを

こちらの句の巧さは後半の措辞。「吊られたる雉」の描写として選択された「蒼蒼」という措辞は、美しい雉の羽のことを述べているのだなあと、思いつつ読んでいくと、最後の「腥し」にも繋がっていくことにハッとします。死んだ「雉」の命の名残の生臭さはまさに「蒼蒼」と臭っているのでしょうか。

雉寄り来天地返し

たんじえりん金子

「天地返し」とは「耕地の土を深く耕して表層と下層の土を入れ替えること」です。春の季語に「耕」がありますが、「天地返し」はまさに耕の現場。春を迎えた豊かな「土の香」に、「雉」が寄つて来るよという一句です。早春の山畑を想像。「雉寄り来」という上五から始めることで、一句にみずみずしい春の力が生まれました。

雉鳴くや犬目、猿橋、鳥沢宿

関野無一

「雉」とくれば、犬、猿と連想する句は沢山沢山届きましたが、こんなふうに二ひねりしてくれると、愉快な俳味が生まれます。「雉鳴く」この街道には、「犬目、猿橋、鳥沢」という宿がつづくのだよ、というウィット。事実であろうが、フィクションであろうが作品の価値は変わりませんが、作者のコメントには「甲州街道にて」と一言添えてありました。

雉の声火のおいする不動尊

28ひろきち

「雉の声」と「火のおいする不動尊」が取り合わせられることによって、光景が一気に立ち上がります。俳句は上から読んでいきますから、「雉の声」のあとに「火のおいする」と続けば、この措辞は「雉の声」の比喩なのかという思いが一瞬過ぎ

馬鈴薯植う

じゃがいも

ります。が、一句読み通してみると「火のにおい」がするかのような「不動尊」が祭られているよ、あるいは「火のにおい」のするお不動さまの境内だよ、という意味が伝わります。二つの意味を併せ持った句として読むのが、一番豊かな読みではないかと思います。

雉過ぎり若沖の絵に戻りけり

雪うさぎ

「雉」で「若沖の絵」を発想した句もありましたね。が、絵に描かれた「雉」が季語として機能するかという点において、この作品の発想は見事な展開を見せます。

「雉過ぎり」までは実景。「雉」だと、その姿を目で追っていくと、なんと「若沖の絵」の中に入っているという虚の光景への誘導。下五「戻りけり」という措辞も、元々「若沖の絵」として描かれている「雉」が時折、絵を抜け出すのかもしれない、という読みを誘います。「若沖」ならではの「雉」の一句です。

日の本の春連れ雉は天中へ

理酔

この句の魅力にも悩殺されました。一見イメージで「雉」を描いているように見えるのですが、国鳥である「雉」の本意をこんなカタチで表現できるとは！と驚きました。「日の本」という大振りの詠い出し、「春連れ」という大胆な季重なり。ちよつと悩んだのは「天中」という言葉ですが、「天誅」^{てんしゅう}「天中殺」^{てんちゅうころ}などのイメージを一瞬もたせるところも、作者の確信的意図かもしれません。

天

一面の焦土女は馬鈴薯植う

中原久遠

今週寄せられた「馬鈴薯植う」の句を、場所のイメージでざっくりと分類すると、北海道の広大な大地に植える「時く光景」と、我が畑や家庭菜園に植える光景との二つに分かれます。

「芋」は里芋、「蒔」は甘藷と、同じ「いも」ではありますが、種類ははっきり区別されていることも覚えておきましょう。また「馬鈴薯植う」を「じゃがいも」と読むか「ばれいしょ」と読むかの判断は、歳時記編者の考えによつて差違があります。個人的には「ばれいしょう」と読んでおりました。「じゃがいも」と読むと、台所の食材めいた気分になるからかもしれません（笑）。

さて掲出句です。「二面の焦土」という措辞から私は第二次世界大戦頃の日本を思い浮かべたものですから、「馬鈴薯」？むしろサツマイモなんじゃないか？とも思ったのですが、いやいや、日本という一つの国の「焦土」を指しているのではないのと腑に落ちました。

世界は戦いに満ちています。時代を越えて、さまざまな理由で紛争が起こり戦争が繰り返げられています。「二面の焦土」となった故国にて、最初に行動を起こすのは「女」たちかもしれないとハッとしします。戦争を起こす男たち、戦争に興奮する男たち、戦争で死ぬ男たちを横目に、「女」たちは、我が子を産み育てることを考えます。「二面の焦土」に打ちひしがれている暇はない。今はまず「馬鈴薯」

地

馬鈴薯植う風におろしやの訛りあり

夜市

「馬鈴薯植う」という季語の扱いの難しさは、別のイモ類や野菜ではない「馬鈴薯」らしさをいかに表現するかということになります。掲出句の場合は「おろしや」^{オロシヤ}「ロシア」の古い呼称を入れることで、北海道「馬鈴薯」という連想を補強します。「風におろしやの訛りあり」という発想にオリジナリティがある作品です。

馬鈴薯植う芽がないやつは山へ放る

初蒸気

先ほどの句が広大な大地に植え付ける「馬鈴薯」ならば、こちらは我が痩せ畑に植える「馬鈴薯」でしょう。種芋を植え付けようとして、「芽がないやつ」は、あ、ダメだなこりゃ、と投げ捨てているのです。「山へ放る」という描写が、上五中七のリアリティを保障します。

穴めがけ馬鈴薯を蒔くちと外す

大塚迷路

広大な土地では機械で植え付けますが、この句はたぶん、畝作りまでは機械がしてくれるけど……という規模？の農家ではないかと思えます。畝までは機械作業だけど、そこからは夫婦二人の手作業。「馬鈴薯」を植えるための穴を開ける作業と、「穴めがけ」で「馬鈴薯を蒔く」作業。下五「ちと外す」にリアリティと可笑しがあります。

植ゑ終へし馬鈴薯畑星の餐

みちる

「植ゑ終へし馬鈴薯畑」までは、畑の広さは分からないのですが、下五「星の餐」によって広大な「馬鈴薯畑」が浮かんできます。「餐」とは、晚餐の「餐」で「飲食すること。また飲食物」を意味します。広大な畑とそこに広がる広大な星空、なんて綺麗な光景なんでしょう。

故郷まで二百五十里馬鈴薯植う

雪うさぎ

「故郷まで二百五十里」という距離が心理的リアリティを生み出します。「故郷まで二百五十里」離れた都会で、故郷の「馬鈴薯植う」作業を思い出しているのと読んでもよいのですが、かつて「馬鈴薯」を植えていた「故郷」は「二百五十里」の彼方にあり、現在は離れた地にて「馬鈴薯植う」作業をしていると読んだほうが、季語としての現場証明があります。「馬鈴薯植う」という下五がどっしりとした印象を醸し出します。

馬鈴薯植うる喉彦の鉄臭し

長緒連

七五五の調べになっていますが、「馬鈴薯植う」という長い季語を調べとしてうまく使いこなしています。「喉彦」とは「口蓋垂の俗称。のどちんこ」のことです。「馬鈴薯植う」は喉の渇く作業。乾いた「喉彦」の感触を「鉄臭し」と言い切るリアリティ。「鉄」の一語の印象が、一鍬ごとに植えていく作業の実感に繋がります。

馬鈴薯植ゑし手で髭を剃る妻を抱く

可不可

こんな発想もあるのだとちょっと驚きました。「植う」「剃る」「抱く」と動詞を三つ使うことで時間経過も表現。個人的な印象になりますが、かつて開拓民として北海道の地にて暮らした男たちの

生活を、この十七音で言い止めようとしたのかもかもしれません。触覚の生々しさをいちいち突き付けられているような作品です。

馬鈴薯植う馬／鈴／薯に分けて植う

比々き

発想という意味ではこの句にもやられました。「馬」の「鈴」「みたいな」「薯」で「馬鈴薯」なんでしょうね。種芋を切り分けて植え付ける様子を「馬／鈴／薯」に分けて植えていくのだよ、と断った愉快。「／」のような記号を使いつつ、ちゃんと詩にしようという見事な愉快です。

だんしゃくを蒔いてて今を悔しんだ くらげを

「難しい兼題の時は回文に逃避しますが、今週は回文的にも難敵……」と語る、くらげを君。なんとまあ、これが「だんしゃくを蒔いてていまをくやしんだ」という回文になっている事に驚きました。作品としての価値云々よりも、よくぞ作られましたね！という感嘆。言葉遊びをここまで徹底してやりぬく根性に敬服いたします。

第141回 2016年3月28日週掲載

かいよせ

貝寄風

天

貝寄風と記す龍涎香の欠片

めいおう星

まずは季語の意味のおさらいをしておきましょう。「陰暦二月二十日前後に吹く西風。大阪四天王寺で行われる精霊会の舞台に立てる供養の造花を、古くはこの風によって住吉の浜に吹き寄せられた貝殻で作ったという。」（講談社『新日本大歳時記』

さらに、この風は龍神が吹かせる風だという伝説もあります。

「貝寄風」が、このような風を意味する季語であると押さえた上で掲出句を読んだ時、「貝寄風」はあくまでも「龍涎香」に付けられた名前にすぎないから、季語としての力は弱いのではないかと、という疑問を持つ人もいるかと思いますが。私自身も最初はそこが気になったのですが、読み解いていくにしたがって、この作品の深さに惹かれていきました。「貝寄風」と記されている箱に入っているのは、「龍涎香」です。このお香は、「マッコウクジラの腸内からとった松脂状の物質。麝香に似た芳香がある」と、大辞泉には解説されています。龍神伝説にも通じる「龍」の一字を冠した名、海のイメージとかさなるマッコウクジラ、麝香に似たかぐわしい薫り。それらの要素は、季語「貝寄風」の由来や伝説と付かず離れずの味わいとなって一句の世界を構築します。

「貝寄風」という名の「龍涎香」は、貝寄風を吹かせてくれる龍神にささげるお香であり、打ち寄せられた貝殻で作る供養の花の香りのようにも思われます。このお香を焚いて肅々と始まる精霊会を想像する時、読者の心は、その貝を砂浜に運んでくれた「貝寄風」という雅びな風へと思いを馳せるのです。

他の風とは違う「貝寄風」らしさをどう確保するか。「貝」のイメージをあしらった句、龍あるいは龍神と取り合わせた句など、木曜日「人」選にも様々な工夫が見られました。「天」に推した掲出句は、それらのイメージを丹念に散りばめつつ、奥が深い。読めば読むほど惹かれていった作品です。

地

潮甘くなつてきた貝寄風吹くぞ

緑の手

「貝寄風」は、四天王寺の精霊雲にまつわる季語でありつつ、伊豆、鳥羽などの船詞としても使われていたそうです。「潮甘くなつてきた」とは、春がいよいよ動き出してきているぞという漁師たちの実感。後半の「貝寄風吹くぞ」という措辞にも勢いがあります。

貝寄風や神獣鏡の青き鏑

檜の木

「貝寄風」という季語に色があるわけではないのですが、「貝」の一字がさやかな色彩のイメージを醸し出します。この貝で精霊会の供養の花を作ったとなれば、そこにはほんのりと色づいた桜貝もあつたに違いありません。かつて鏡は占いや祈りに使つたもの。「神獣鏡」に兆した「青い鏑」とのひそやかな色彩のイメージの対比も味わいです。

貝寄風の名のある島へなき島へ

まどん

●組長の『絶滅寸前季語辞典』の例句「貝寄せや愚な貝もよせて来る」（松瀬青々）の「詠み捨て」感（？）をだしてみました。例句が少なく、つかみどころなく。調べたら日本の島の数6852あり、90%以上が無人数島とか。／まどん

○季語「貝寄風」というと、思い出すのが松瀬青々のこの一句。読み捨て感と評するまどんさんの感覚にも共感します。「名のある島へなき島へ」という措辞は美しい瀬戸内海の光景を思い出させます。さまざまな島のさまざまな浜に打ち寄せる貝のいくつが、住之江の浜に流れ着き、精霊会の造花として使われたのかしら……と、そんな遙かな思いもよぎります。

貝寄する風に目蓋をうすく閉づ

えらいぞ、はるかちゃん！

一読、弥勒菩薩の「目蓋」が思い浮かびました。勿論、自分自身の「目蓋」と読んでもよいのですが、「うすく」という描写が映像的なため、自分以外の誰かの「目蓋」ではないか、と思わせるのでしょうか。弥勒菩薩は「目蓋」を「うすく」閉じて、「貝寄する風」に耳をすませているのかも知れません。そして、作者もまた遠い海辺に寄せる「貝寄する風」へと思いを馳せているのでしょう。聞こえない音を聞きとめることができるのが俳人のシアワセな能力です。

貝寄風の波色月の死んだ色

海田

「貝寄風」は色を持たない風ですが「貝寄風の波色」という表現は、貝の色や波の色がそのまま風の色となつたかのような味わい。「月の死んだ色」とたたみ掛けることによつて、「貝寄風」はさらに深い色となつて、読者の目蓋にうかんできます。「貝寄風の波色」に「月の死んだ色」がイメージとして重ね合わせられることで、一句はさらに玄妙な味わいを獲得するのです。

貝寄風やワスレ貝とかマクラ貝

らつこマミー

兼題「貝寄風」に、うっかり「桜貝」を入れて季重なりになつてしまつた句が思いの外多かつた今週。多くの貝が季語となつていますので、この発想は要注意ではあつたのですが、この句だけは巧くやれたなあと感じました。「ワスレ貝」も「マクラ貝」も実際にある貝の名ではありますが、明確な季語として扱う歳時記は少なく、しかも「ワスレ」「マクラ」という言葉が詩的意味を持ちます。誰かを思う気持ちだが、「貝寄風」に吹かれて流

れ着く「ワスレ貝」や「マクラ貝」という名に心ふるわせるのでありましょう。

こんなのを貝寄風やとか云うてます

軌一

はは！大阪の言葉をそのまま使つて、住之江の岸に吹く「貝寄風」を表現するとは、これも一つの機知ですね。「こんなのを」〜とか云うてます」という語りで、読者を無理矢理「貝寄風」の現場に立たせるのも、大阪っぽい強引さというか（笑）。こういう発想も好きだなあ。

貝寄風やいづれ化石となるホルン

紆夜曲雪

さらに、こんな発想もあつたか！という一句。中七下五の発想そのものが詩ですね。くるくる巻いた「ホルン」の形にアンモナイトの「化石」が重なってきます。

この中七下五のフレーズが面白いだけに、正直なところ、上五「貝寄風」という季語が主役と成り得ているのかという点に多少のともども覚ええます。ひよつとすると、さらなる季語との出会いがありそうな予感もする作品ではあります。

第142回 2016年4月11日週掲載

海胆

天

海胆にまだ流星たつた頃の色

酒井おかわり

「海胆」が主役の季語。そして「流星」が比喻として使われている脇役の季語。季重なりの作品です。「海胆」の形から星を連想する句はそれなりにありましたが、月・星・銀河など天体を思わせる言

葉と取り合わせた句もありましたが、それらの作品の中で、掲出句は奥行きのある味わいを醸し出しています。

あの面妖な形をした「海胆」には「まだ流星だった頃の色」が残っているのだよ、といわれると、一瞬、ん？と思います。ムラサキウニの暗紫色、バフンウニの暗緑色、ガンガゼの黒紫色。どこが「流星だった頃の色」？と思った瞬間、我が脳内に宇宙が出現しました。

惑星のような形をした海胆たち、暗い蒼い海底、そよぐ海藻。「海胆」の体内には「流星」であった証のDNAが潜んでいるのかもしれないという妄想がひたひたと動き始めます。

「流星」とは「宇宙塵が地球の大気中に高速で突入し、発光する現象。高度100キロ付近で衝突・発熱して輝き、多くは大気中で消滅する。特に明るいものを火球という。大きなものは地上に落下し、隕石という。」とネット辞書には解説してあります。となれば、「流星」のうちの幾ばくかが海に墜ち、「海胆」となったのかもしれないではないか。海底という過酷な環境で生きるために、小さな五つの歯が生えてきて、ガジガジと昆布をかじり始めたのかもしれないよ。

その証拠に、「海胆」の殻を割って中を見てごらん。燃える「流星」の色をした卵巣が、五弁の花のように並んでいるのだろ。

地

どこが口どこが肛門海胆へ波

矢野リンド

「どこが口どこが肛門」という措辞は、まさに「海胆」の特徴を言い当てています。上五中七だけだと一種の説明に終わりがねないのですが、下五「海

胆へ波」によって、「口」だか「肛門」だかわからない小さな穴に「波」がひたひた寄せる光景がみえてきます。

静かなる混雑海胆の棘動く

ばむだ木下

平明な描写ですが、「海胆」の生態をきちんと表現できています。「静かなる混雑」という抽象的な措辞が、後半「海胆の棘動く」という措辞によって、リアリティのある比喩に変容するところに一句の工夫があります。

メルカトル図法の世界へ放つ海胆

長緒連

最近、養殖して一センチぐらいになった「海胆」を放流する技術も確立されているのだそうです。ただの「海」ではなく、「メルカトル図法の世界」という表現に詩があります。「メルカトル図法」の特徴は「角度が正しい、すなわち十分狭い範囲だけを見ると形が正しい」とネット辞書には解説してあります。すべての海は続いているけれど、「メルカトル図法の世界」とは、「海胆」を放つ我が海を意識の中心に置いた「海」なのかもしれませんね。

水槽に海胆が沈んでゐる雨も

Y音絵

こちらは「水槽」の中の「海胆」です。水族館のような「水槽」ではなく、学校の生物教室を思い浮かべました。「水槽」には「海胆」が「沈んで」いて、水槽の向こうに見える窓には「雨」が降っている。切り取られた眼前の光景はすべて濡れているのに、作者の心は乾いているかのような感觸の作品です。

海胆の香やゆふべ孕みしこと確か

妙

兼題「海胆」からこんなことを考える人がいるのか、と吃驚。「海胆の香や」という詠嘆は、今、「海

胆」を食べているその香り、と読みました。「ゆふべ孕みしこと確か」という眩きは女の生々しい実感。舌に溶ける「海胆」のなんと妖しくなまめかしい感觸か。

海胆ひとつ思考の明り灯したり

ジャンク洞

「海胆」を表現する方法として、「思考」という言葉が出てくるとは思いませんでした。今回この兼題に挑んで、「海胆」の器官に「アリストテレス」の名がついていることを初めて知りました。「殻の下面には丸い穴があり、ここに口が開き、口の内部には「アリストテレスの提灯」と呼ばれるウニの咀嚼器がある。白い石灰質で、5個の歯からなる。」（以上、ネット辞書より）

「海胆ひとつ」から、「思考の明り」へジャンピングする発想に惹かれます。下五「灯したり」によって、アリストテレスの提灯？という解釈が、読者へと手渡されていく配慮も有り難いですね。

ラジオより避災地のこと海胆のこと

誉茂子

兼題「海胆」から、「被災地」へ思いを馳せた句もたくさんありました。ややもすると、その思いが先走ったり、思いのほうが比重を占めてしまったり、バランスを崩し易い句材ですが、掲出句はそのあたりの配慮がうまく機能しています。

「ラジオ」を通して「避災地のこと」を思い、その被災地に「海胆」が戻ってきたことを喜ぶ。眼前に「海胆」が無いではないか、という指摘をする人もあろうかとは思いますが、作者の脳裏にはありありと「海胆」の光景が立ち上がっていることがわかります。読者もまた思いを同じくすることができると作品です。

海、白磁、雲丹、我が浦の三色旗 関野無一

「海胆」「海栗」は生きているウニですが、「雲丹」は加工されたものを指します。が、それにしてもこの句の発想に惚れました。「海」の青、「白磁」の白、「雲丹」の黄金色？鬱金色？それを「我が浦」の「三色旗」であるよと言いつつ誇りに拍手です。

超新星爆発 海胆に刺

みちる

今週の「天」の句と同じく、「海胆」に天体のイメージを重ねる発想ですが、なんとも大胆！宇宙のどこかで「超新星爆発」が起こったことで、「海胆」に「棘」が生える？伸びる？のでしょうか。表記は、勿論芸術的意図をもつての「マス空け」です。

さて海胆は爆発三十五秒前

JRもちずきん

最後にこれも紹介しておこう！（笑）

「海胆」をじっと見てると、「爆発」しそう！と思ったんだろうね。その発想だけだと、作品として味わうところまでにはいかないのですが、「さて」という導入、「三十五秒前」という絶妙に可笑しい間合いが俳諧味を出しています。読者は、じっと「爆発三十五秒前」の「海胆」を眺め、爆発するさまを想像したり、そんな馬鹿など笑ったりして楽しむのです。

第143回 2016年4月25日週掲載

菜種梅雨

なたねづゆ

天

菜種梅雨切り絵の蝶に囲まれて

矢野リンド

「菜種梅雨」とは、菜の花が満開となる頃にしろ

しと降り続く雨です。雨が降れば外に出て遊べない。長雨が続きと農作業も滞る。雨の続く日々の退屈しのぎに何をするか。その選択肢に「切り絵」があってもよいでしょう。

長雨の日々の手持ちぶさたに「切り絵」をしてみる。幾つもの「切り絵」で「蝶」を作ってみる。「切り絵の蝶に囲まれて」という措辞は明るい雰囲気を持ちつつも、長雨の手さびという退屈で憂鬱な気分をも表現します。

さりげなく巧いのが下五「囲まれて」という措辞です。退屈にまかせて、出来不出来のある「切り絵の蝶」たちを、己の身の周りに、切り散らかせている様子が、「囲まれて」というさりげない表現で巧く述べられています。

菜の花は強い花ですから、長雨に打たれても花を保ちます。雨が止んだ日、辺り一面の菜の花たちは首をもたげ、太陽に顔を向け始めます。広い菜の花畑に、虫や鳥たちも戻ってきます。そんな菜の花の光景へ一番最初に解き放たれるのが、「切り絵の蝶」たちかもしれないと、そんな幻想も抱かせてくれた作品です。

長雨にもさまざまな表情がありますが、「梅雨」とは違う「菜種梅雨」という季語が内包する明るさ。その明るさの芯にある愁いめいた湿度。それら季語の成分を余すところなく見事に描いている作品です。

地

菜種梅雨きのふはもはやうすあをし

鈴木牛後

何日も続く長雨の中、今日という日と「きのふ」という日の境界線が曖昧になっていく感覚に共感します。「もはや」という時間のイメージ、「うす

あおし」という色彩で表現された記憶の感覚が、「菜種梅雨」という季語と響き合います。

菜種梅雨紀州は雲を産める国

不可

「紀州」は山の豊かな「国」です。その深い山並みのはるか上に「雲」が産まれ、その雲によって長雨が降り続くのでしょうか。その雨によって育まれる草木は、「紀州」という国の宝でもあります。「紀州は雲を産める国」というどっしりとした措辞が、季語「菜種梅雨」を豊かな雨として表現します。

菜種梅雨とこしなへなる土へ礼

クズウジユンイチ

視線を下へ向けると、こんな「土」も見えてまいります。「とこしなへなる土」とは、まさに私たちが生きる大地です。「菜種梅雨」によって潤う「土」は、さらなる「とこしなへ」への基盤です。最後の「礼」の一語に作者の思いが凝縮されます。

菜種梅雨砂場の砂の量を思ふ

Y音絵

視線は同じように下を向いていますが、「とこしなへ」を共に生きる「土」への感謝の要素は全くありません。菜の花の咲く頃の長雨に打たれている「砂場」がそこにあるだけです。

「菜種梅雨」という季語には春愁めいた感情が内包されていると思うのですが、「砂場の砂の量思ふ」という一種ナンセンスな遊びが、乾いた愁いを想起させます。

スコップに鏝の花咲く菜種梅雨

和笑

長雨の続く砂場には、こんな「スコップ」が忘れ去られていたりします。中七「鏝の花咲く」という措辞が、「スコップ」という物、「菜種梅雨」と

すし 鮓

天

龍の息めく鮓鮓の臭気なせり

佐藤直哉

今週の兼題について「鮓」は熟れずし、「鮓」は押し鮓や握り鮓「寿司」は目出度い当て字という違いが分かってくると、漢字って面白いなあ！と改めて思います。

夏の季語「鮓」の「天」に推すのは、やはり熟れ鮓を詠んだ句をと考えていたのですがこんな「鮓鮓」の句を発見！「臭気」という読みがあるのを知りませんで、日本国語大辞典を引いてみました。名詞「香」とあり、「お酒の臭気がして」という用例も載っていました。「しゅうき」でも「におい」でも、ましてや「かおり」でもない「鮓鮓」の匂いを表現するのに、こんな言葉があったのかと合点致しました。

「鮓鮓」は琵琶湖を擁する滋賀県の名産。江戸時代以来、主に琵琶湖の固有種「ゴロブナ」が使われてきましたが、ゲンゴロウブナも使用されているのだそうです。「鮓鮓」の臭いを詠んだ句は沢山ありましたが、「龍の息めく」という比喻が卓抜。その比喻を「臭気なせり」という古風な言い回しに受け止め、一種の格調も醸し出します。

想上の生き物「龍」ではありませんが、その生々しい「息」を想像できるのが俳人たる嗅覚。琵琶湖に潜んでいる「龍」だから、沢山の鮓を食べているに違いない。一気に吸い込まれた鮓たちは腹の中で長い時間をかけて発酵しているかもしれない。となれば、その「龍の息」もきつと腥いに

り、そこへの詩的共感を覚えました。これから産まれてくる「胎児」のイメージが、春の「菜種梅雨」の光景とひそかに響き合うのかもしれない。

ワイバーのラルゴ刻むや菜種梅雨 クラウド坂上

そういう意味ではこの句も「菜種梅雨」としての必然性があるのかどうか、ちよつと迷いましたが、「ラルゴ」という一語の多義性が、まさに「菜種梅雨」を表現しているのではないかと思えてきたのです。「ラルゴ」とは「きわめてゆるやかなテンポ」を指示する音楽用語。「たつぷりとした表情と持続感を意味すること多いのだそうです。「ワイバー」の動きが極めて緩やかに動くのが「菜種梅雨」であり、それは菜の花の咲く日々をいつまでもいつまでも降り続く雨であります。

ついでにいうと、日産のラルゴという車種があったりするもんだから、さらにツポにはまつてしまった次第です（笑）。

なたねづゆ河童ぼろぼろ生まれくる 中原久遠

すみません、全く個人的に、さらなるツポにはまつてしまった句です。「なたねづゆ」という平仮名書きのあとに出現する「河童」までは、日本昔話のような世界を描こうとしているのかと思つたのですが、「河童ぼろぼろ生まれくる」という光景がなんともはや、日本昔話風ファンタジーホラー。雨にぐつしよりと濡れた菜の花畑の中から、産まれたばかりの青黒い「河童」が産まれてくる?!と思つただけで、鳥肌が立ちました。恐ろしいけど可愛い。カワイイけど愛せない。忘れたいけど忘れられない句となりました（笑）。

菜種梅雨返却ポストの底深し ぼたんのむら

長雨が續くと、ついつい図書館の本を返しにいくのも億劫になりますが、今日は返却日だから……と出掛けてきたのでしょうか。本を入れようとした「返却ポスト」がまるで「底」のない深さをもっているかのように感じ、率直に「底深し」と言い切つたところに詩が産まれました。

菜種梅雨鉾物標本庫に光 海田

「菜種」の黄色「鉾物」の無彩色。「菜種梅雨」の湿つた手触り、「鉾物標本庫」の堅い手触り。「くに光」という最後の措辞が、異質な二つの言葉を繋ぐ一点の共通項として置かれています。その工夫がなんといつても巧い一句。ただ暗いだけの「梅雨」ではない「菜種梅雨」の特質が生かされています。

猫に似る扉のきしみ菜種梅雨 睡花

「菜種梅雨」ですから、何かが湿気で軋んでいるという発想はいくらでもあります。特に「扉」は身近なモノですから、類想が集中しそうな素材です。が、上五の「猫に似る」という比喻だけで、発想のオリジナリティと描写のリアリティを手に入れているのですから、大したもの。す。「猫」に似た「きしみ」の音を立てる「扉」の向こうに、濡れた菜の花畑が見えてくるようです。

ゆうつつは胎児のかたち菜種梅雨 岩魚

「菜種梅雨」である必要があるのか、という一一点において少し迷つた句ですが、「ゆうつつは胎児のかたち」という比喻に、春の鬱々たる気分があ

違いない。琵琶湖へのご挨拶も含めて、二重三重の仕掛けをもって「鮎鮠」という季語を見事に表現した作品です。

地

予想したものとは違う鮎が来た

カリメロ

こんなざつくりとした句なのに、「鮎」「鮠」「寿司」の違いを把握した上での心理にして、真理になっているのが可笑しくて可笑しくて。「予想したものとは違う鮎」を見つめる作者の驚きの後に押し寄せるのは、熟れ鮎の強烈な臭いなんでしょうね(笑)。

鮎鮠とある木簡の臭からむ

鞍草子

ネット辞書には「日本の「ふなずし」の歴史は奈良時代にまで溯り、長屋王家木簡や二条大路木簡に「鮎鮠」や「鮠鮠」の語がみえている。」とあります。発見された「木簡」には「鮎鮠」の二字。その「木簡」にも「鮎鮠」の臭いが残っているに違いないという発想がユニーク。「鮎鮠」が目の前にはないのですが、強烈な臭いの印象で季語を描きました。

愛しく食ぶ雪晒てふ名の鮎を

土井探花

「雪晒」という「名」がなんとも美しい「鮎」です。本当にこのような「名」の熟れ鮎があるのかどうかは知りませんが、この「名」の美しさとともに「愛しく食ぶ」名代の熟れ鮎なのでしょう。上五を用言二つで構成してからの語順が巧いですね。

切られたる鮎切り口に迷いなし

笑松

イメージとしては四角く切られた押し鮎かなあとも思いますが、非常にシンプルな言葉で「切り口」

の映像が見事に再生されています。下五「迷いなし」が作者の感情ではなく、「切り口」を描写する言葉になっているのがテクニクってやつですね。

湿原の真中の宿の熟るる鮎

糖屎猫

広い光景からズームアップしていく手法ですが、それにしてもここまでズームアップするか?!とも思いました(笑)。上五「湿原」ですから、山中でしょうね。その「湿原」の真ん中の「宿」で客をもてなすためにつけられた「鮎」が熟れていく。熟れ鮎とは、魚が貴重なものである山国の知恵というやつなんでしょう。夜の風にのって匂ってくる「湿原」の湿りが、「熟るる鮎」と相俟つての一句です。

鮎つまみ色売る前の虫養い

江口小春

一読、ニヤリとさせられた一句。「虫養い」とはお腹が減った時にちよいとものをつまむこと、あるいはその食べ物指します。お腹の虫を養ってやるって意味ですね。

「鮎」の一字を厳密に受け取って、臭い熟れ鮎を想像しました。「鮎」を二切れちよいとつまみ食いをして、ささやかな腹ごしらえをしてから何をするかという「色売る」とくる展開。なんたる俳味でありましょう(笑)。さらに「虫養い」という言葉は、空腹だけではないそれ以外の欲望についても使う場合があるらしく、なかなか意味深長な一句であります。「色売る」女の口から熟れ鮎の臭いがするようで、読めば読むほど可笑しい。

鮎鮠にはずむ方言周圏論

くろやぎ

「方言周圏論」とは柳田国男の説。「文化の中心地で相次いで新語が生まれ、それが波紋のように周辺に伝播した結果、同心円状の分布が形成され、

発生の古い語ほど外側の遠隔地で見いだされることになると説く。」と大辞林には解説されています。「鮎鮠」をつまみながら「方言周圏論」を語りあうという場面もさることながら、付かず離れずの取り合わせ感覚が秀逸。「鮎鮠」という食文化も似たように伝播していったのかもしれないね。

巻寿司の上手は大概お節介

初蒸気

今回の兼題「鮎」をどの範囲で受け止めていくかは、大変悩ましい問題です。握り鮎や散らし寿司などがどこまで季節感を持つことができるのか。それらの鮎は握られるネタや散らす具材によってさまざまな季節を表現する食物ですからね。厳密に言えば夏の季語は「鮎」のみに限定すべきかもしれないのですが、投句された中には愛してやまない句も沢山ありました。

「巻寿司」って結構手間がかかりますよね。それを手早く「上手」に作れる人は、「大概お節介」だという定義に納得というか、笑ってしまおうというか。「巻寿司」名人の知り合いのオバサンの顔が浮かんできますよ(笑)。

回されて鮎は落ち武者めいてくる

瓦すずめ

回転寿司は季語ではないよ!と今週の「俳句道場」にも書きましたが、この一句は可笑しすぎます。「回されて鮎は」で回転寿司であることを端的に伝えつつ、後半の「落ち武者めいてくる」という比喩がツボに入ってしまった。季節感はないけど、無季句としてのインパクトは充分あるんじゃないかな。これから回転寿司に行くたびに、何周も何周も回っているのが「落ち武者」に見えてしまうだろうなあ(笑)。

みかん はな 蜜柑の花

天

蜜柑の花散つて熊楠まつばだか

博士

「熊楠」とは南方熊楠のこと。博物学者で生物学者で民俗学者。ネット事典には以下のような解説もあります。【1867年5月18日（慶応3年4月15日）～1941年（昭和16年）12月29日。18言語を解し、「歩く百科事典」と呼ばれ、熊楠の言動や性格が奇抜で人並み外れたものであるため、後世に数々の逸話を残している。」

驚異的な記憶力を持ちつつ様々な奇行でも有名な人でした。「まつばだか」もその一つ。ふんどしだけで野山を跋扈していたとの逸話を思う時、後半の措辞「熊楠まつばだか」は微笑ましくもあります。熊楠が生まれた和歌山は、蜜柑の産地。彼の地の「蜜柑の花」の濃厚な香りは、奇才の脳髓を刺激していたに違いないと、そんな妄想も抱きます。臨終の際に「花が消えるから」と医者拒否したという熊楠。「蜜柑の花散つて」は、熊楠という巨星への弔辞であり、小さな星のような花をこぼして後に実る蜜柑への賛辞でもあるのでしょうか。

地

蜜柑の花食べてきれいな白い鳥

雪うさぎ

「蜜柑の花」は小さな白い星みたいな花です。その「蜜柑の花」を食べるからこんなに「きれいな白い鳥」になったのねと、鳥に話しかけているかのような味わいの作品です。

花蜜柑神は荒々しく遊牝む ウェンズデー正人

「遊牝む」とは、交尾すること。「花蜜柑」の濃厚な香りは、その香に慣れぬものにとつて強い刺激です。濃く甘い香りの中、神々は「荒々しく遊牝む」のだよという幻想が、読み手の脳髓をうつとりとさせます。これも「天」に推したかった作品です。

權止めて蜜柑の花を聞きゐたり

とおと

「香を聞く」ということばがあります。日本語とはまことに豊かな言語だと思えます」と語る作者とおとさん。「權止めて」という上五が美しいですね。この濃厚な香りは何かしらと「權」を止めたのでしょうか。鏡のような湖面を囲む「蜜柑の花」を思うだけでうっとりします。

花蜜柑柩の中を明るうす

比々き

「柩の中を明るうす」とは、「花蜜柑」の香りによつてそのように感じられるということなのでしょう。真ん中に「柩」が置かれ、その周りを悼む人々が取り囲み、さらにその周りを「花蜜柑」の香りが包み込んでいるような、美しい空間を思わせられる作品です。

かわらけは地より蜜柑の花匂ふ

すな恵

「かわらけは地より」で軽く意味が切れます。土器片は地より発掘され、その地は「蜜柑の花」の香りに覆われているよ、という一句。かつて、その「かわらけ」が使われていた時代にも、「蜜柑の花」はこのように香っていたに違いありません。

太陽の死ぬ日蜜柑の花ふんと

葦信夫

「花蜜柑」という季語を思う時、それは一本の蜜

柑の木ではなく、蜜柑畑の光景を思うのではないでしょうか。「太陽が死ぬ日」という幻想を抱かせるのは「蜜柑の花」の香りのせいかな。最後の「ふんと」が詩的リアリティのある擬態語です。

蜜柑の花が初夏を増産しています

とりとり

もつとあつからんと「蜜柑の花」を表現した一句。勿論季重なりですが、主たる季語は「蜜柑の花」ですね。「蜜柑の花」が咲くと、五月だな「初夏」だなと思う気持ちを「初夏を増産しています」と口語でさらつと語った点に共感を抱きます。

触覚も尻も蜜柑の花まみれ

樫の木

今週の「俳句道場」に、蜂との季重なりの句が幾つかありました。蜂という言葉を使わないで、蜂かな虻かなと想像させることはできるのでね。「触覚も尻も」と並べることで動きも表現し、「まみれ」の一語で状態も描写できる。これぞ、言葉の映像というべき技です。

第146回 2016年6月6日週掲載

蜻蛉生る とんぼうま

天

蜻蛉生るたちまち空は立体へ

矢野リンド

俳句ポスト365の底本『新日本大歳時記』（講談社）には傍題として「やご・太鼓虫・蜻蛉の子」などが載っています。が、「蜻蛉生る」という季語は生まれるという短い時間を内蔵しているわけですから、傍題とは全く気分が違うよなあ……と個人的には思っております。

「蜻蛉」が羽化することを「生る」と表現する気持ちは、変容への感動。その喜びが広がっていくような作品を探したいなあと、かまえていたミットにバシッと入ってきたのがこの句です。

やごの背が割れて、羽化が始まります。頭、胸、やわらかい翅、そして脚が出て、踏ん張りながら腹の部分を引っ張り出します。「蜻蛉」がトンボとしての全き姿を手に入れたとたん、「蜻蛉」にとつての「空」もまた「たちまち」に「立体へ」と変容していきます。

二万個もあるという複眼で、「蜻蛉」は立体となっていく「空」を凝視します。「空」が完成し、我が翅がしつかり伸びきつたのを確認して、「蜻蛉」は蜻蛉としてその空へ飛び立ちます。

「蜻蛉生る」短い時間の感動を、3Dの映像のような「空」でもって表現してしまうとは、なんとカッコいい発想！翅のある虫はたくさんいますが、「空」を「立体へ」変えてしまえる力を持っているのは、空との親和性があり、存在としての勢いを持つ「蜻蛉」しかないだろうと思う次第です。

地

蜻蛉生るさいしよに見たのは雲でした

さな(4さい)

「蜻蛉生る」瞬間を「さいしよ」に見たのが「雲」だったという発想のなんと可愛いことでしょう。夏が動き出す頃の「雲」は元気な雲。生まれた「蜻蛉」と一緒に風を追いかけるのかもしれないね。

ちちいろにうまれてたけきとんぼかな

クズウジュンイチ

「ちちいろ」のリアリテイ、「たけき」のオリジナ

リティ。平仮名ばかりで書かれた表記のやわからさは、まだ乾いてない翅の感触を伝えるかのようです。一物仕立てに真正面から挑戦した見事な作品です。

これが風というものどころか蜻蛉生る うしうし

生まれてくる「蜻蛉」に憑依できるのも俳人ならではの想像力。柔らかい翅に触れるこの優しいものが「風」というものだろうか」とつぶやく生まれただけの「蜻蛉」。まるで宮沢賢治の童話のような発想です。

蜻蛉生れ損なひ風に吹かれをり スズキチ

同じ「風」に吹かれている「蜻蛉」ですが、うまく羽化できずに生まれ損なってしまう「蜻蛉」もいるのです。淡々と述べることによって、読者の脳内にありありと映像を再生させる。これが俳句的描写の力です。

生れ損ねたる蜻蛉を亀が喰ふ ポメロ親父

同じく「生れ損ね」てしまった「蜻蛉」ですが、「亀が喰う」ところまで描くと、逆に滑稽な感じさえしてきます。生きることも死ぬことも、どちらも滑稽な一事実に過ぎないと言ったのは、誰でしたっけ。生きるとはなんと切なく愛おしい営みでしょう。

蜻蛉生る黒き目玉のやうな沼

櫂の木

「蜻蛉」＝「目玉」という発想の句は沢山あるのですが、中七「黒き目玉」が「沼」の比喩になっている展開に工夫があります。こんな「沼」で生まれる「蜻蛉」たちは、どれも猛々しいに違いありません。

蜻蛉生るかつて被爆の深潭に

えらいぞ、はるかちゃん！

「潭深」とは深い淵のことです。「かつて被爆」したので、広島や長崎の地が思い浮かびます。（被爆）ならば福島を思い出さね。原爆投下から七十一年たった今、「蜻蛉」たちは平和の象徴のようにきらきらと生まれてきます。

蜻蛉生る青いトマトの匂ひして

トボル

「蜻蛉生る」という季語の成分を嗅覚から考えた作品。勿論「トマト」も季語ですが、比喩として使われているので、主たる季語は「蜻蛉生る」になります。「蜻蛉生る」時の「匂ひ」を嗅いだことはないのですが、青臭い「トマト」の匂いがしそうな気にさせるのが、この句の力つてやつでしょう。

牡牛座に生まれ蜻蛉は戸惑った

葦信夫

ははは！私も「牡牛座」です。私は戸惑いませんでしたが（笑、「蜻蛉」の中には戸惑うやつもいるでしょう。特に、イトトンボ系の「蜻蛉」は戸惑うかも。乙女座がよかったワ……なんてね。口語の語りと発想の楽しさがマッチした一句です。

第147回 2016年6月20日週掲載

いざいざ

天

すうすうとごきぶりひげを揺らしをり

クズウジュンイチ

なるほど、こりゃ「ごきぶり」っぽい動きだ！と納得して、すぐに次の句に目がいってしまったの

ですが、何度目か読み直し選び直していくうちに、
どんどん存在感が増してきました。

「ぎぶり」なんて大嫌い！という人にとつて、「ぎぶり」を観察して写生するなんて、拷問だと思えないでしょう（笑）。一物仕立ての難しさは、観察し続ける根気、発見できる感覚、それを表現できる技術、三拍子揃わないと作品として成立しないことです。

この句の何に感心したかというと、たった一点（という失礼ですが、「すうすう」というオノマトペです。「ぎぶり」の髭を凝視して一句にしようと考えた時、「ひげ」の動きを誰もが観察するはずですが、あの独特のそよごうな動きを「すうすう」とは、なかなか表現できるものではありません。オノマトペをここまで己のものにできると、爽快だろうなと思います。

清涼飲料水か、サロンパスか、どちらかといえば心地よさげなオノマトペ「すうすう」が「ぎぶり」の様子として描かれる意外性。そこにオリジナリティとリアリティが表出します。

「ぎぶり」に遭遇する。凝視する。「ぎぶり」もこちらを窺っている。「ぎぶり」は「ひげ」だけ動かす。「すうすう」と「ひげ」を揺らす。次の瞬間、逃げるのか、飛ぶのか、叩き潰されるのか。「をり」というささやかな時間を含んだ叙述が、その後の展開をあこれと想像させるのも、さすがのテクニクです。

地

形勢はぎぶり飛んで逆転す

ごぼうの花

「ぎぶり」が飛ぶという事実には唖然とするのは、いつかどこかで誰でも経験することではないでしょ

うか。「形勢は」という語りから始まるのが、巧い一句。「ぎぶり飛んで逆転す」の後に、誰かの悲鳴も聞こえてきます。

ぎぶりの住まい阿弥陀の尻あたり

クラウド坂上

「ぎぶりの住まい」が「阿弥陀の尻あたり」であるという事実そのものに諧謔があります。「巢」とか「住処」ではなく「住まい」という言葉を選んだのも成功。「尻あたり」と曖昧にした点も味わいです。

神饌も順路の一つ油虫

樹朋

こちらは神社でしょう。「神饌」は神にささげられる飲食物の総称。毎日新鮮な食べ物、飲み物が饗されるのです。「油虫」ととつては、なんたる贅沢な住処でしょう。中七「順路の一つ」という表現によって、日課としての動きも見えてきて、巧いですね。

逃げ切りしぎぶりに壁高からず

江戸人

「ぎぶり」と「壁」を描いた句は沢山届いたんですが、「ぎぶり」の爽快なふてぶてしさを描いた点が、金曜日に推したかった大きな理由です。「逃げ切りし」から得意げな「ぎぶり」を描き、最後に「壁高からず」と見上げる視点で再度「ぎぶり」に焦点をあてるあたり、ベテランならではのテクニクです。

ぎぶりの一番多く死せる壁

大塚めろ

こちらは、逃げきれず頓死した「ぎぶり」です。この「壁」の下あたりが「ぎぶり」ととつて居心地のよい場所なのでしょう。何度でもこの「壁」を這う「ぎぶり」を叩き潰してきた事実。「二番

多く死せる壁」には、「ぎぶり」の計みたいな染みがてんと付いているに違いありません。

ぎぶりをくるみ新聞よく燃える

石川焦点

こんなささやかな実感の句もありました。叩いた「ぎぶり」を包み取った「新聞」をボイと火に放り込む。竈の火か、五右衛門風呂を焚く火かもしれません。「よく燃える」ような気がするのには、「ぎぶり」の生き物としての油なのか、はたまた人間への恨みか。そんなことも思わせる俳諧味の一句です。

ぎぶりのぐるぐる延長コードかな

希望峰

はは！これも実感ですね。叩き潰そうと一撃すると、逃げられる。なにくそ、と次の一撃を構えると、なんと「延長コード」の下をくぐって逃げやがった！後半「延長コードかな」という詠嘆がため息のようにも読める共感の一句です。

豚千頭湯がける鍋や大ぎぶり

ウェンスデー正人

一度に「豚千頭」を湯がいているわけではありません。これまで通算すると「豚千頭」を湯がいてきた「鍋」と読むのが妥当でしょう。使い込んだ「鍋」は磨き上げられているのでしょうか、それとも、汚れるまま煤けるままの真黒な「鍋」でしょうか。下五「大ぎぶり」の「大」の一字には、豚を湯がく臭いが染み込んでいるかのような迫力があります。

ぎぶりを閉じ込めちゃった葉箱

檜の木

はは！これも笑うしかないですが、ご本人にとつては困惑しきりでしょう。この「葉箱」、赤十

字マークが付いてるような昔ながらの木箱を想像しました。

あ！「ごきぶり」！思わず、蓋の金具をカシャッと締めたものの、あっ……どうしよう、という困惑を書くことで、「ごきぶり」という生き物を描きました。

ごきぶりのフェロモン臭きマッチ箱 ポメロ親父

これにも共感します。昔ながらの古い大箱の「マッチ箱」を想像しました。桃太郎印みたいなヤツね。竈の火をつけるために、いつも同じ場所に置いてあるような「マッチ箱」です。

火をつけるとなんか妙な臭いがする。よく見ると「マッチ箱」には「ごきぶり」の糞がいつぱいくっついてる。「ごきぶり」たちは、この「マッチ箱」の中で、排せつしたり、交尾したりしてんのかもいけない、と思う。ひよつとしてこの臭いは「ごきぶりのフェロモン」かもしれない……?!と思う、この想像が愉快です。

第148回 2016年7月4日週掲載

冷麦 ひやむぎ

天

冷麦のなんと気楽や箸の国

みなと

「冷麦」と「冷索麺」も、まさに似て非なる季語たち。火曜日「俳句道場」でも話題になっただけですが、両者の違いは太さのみというのですから、その違いをどう表現するべきか、悩んでしまいます。

「索麺」について、ついでに述べておくと、俳句ボスト365の底本『新日本大歳時記』（講談社）で

は「冷索麺」の傍題として「冷索麺・冷麺^{ひやめん}・索麺冷やす・索麺流し」などが採録されています。例句には「索麺」の句も載っていますが、季語として「索麺」は入っていないのも、今回気付いたことでした。

さて、話を戻しましょう。「冷索麺」のほうがボリュームだけど、食べてみると「冷麦」も美味しい！と感じる人も多いはず。ほんの少し太いだけの「冷麦」ですが、その喉ごしの良さが特徴。夏の食べ物の季語ですから、いかにも心地よく美味そうな句を探したいと思っていた心に、この句が飛び込んできました。

索麺よりもちょっと太いから茹でるのにも時間がかかるんじゃないかしらと思っていたけれど、実際に茹でてみれば、あつという間に茹でるし、喉ごしも気持ちいいし！そんな実感が思わず「冷麦のなんと気楽や」という言葉になって転がり出たのでしょう。「や」はすぐ上の言葉を強調します。この句の場合は「気楽」という心持ちが、「や」の一言によって、弾むように読み手の心に飛び込んでくるのです。

「冷麦」という季語を含む上五中下のフレーズで、言いたいことはほぼ言い得ているわけですから、このようなタイプの句の難しさは、下五をどうまとめるか。「お昼時」なんて時間、「夫婦にて」なんて人物を述べたのでは、一句はちまちましてきます。「箸の国」という悠々たる収め方のなんと巧いことか！「箸」というモノの形の美しさ、機能、「箸」に挟まれた「冷麦」の美しさに、改めて感じ入ります。「箸の国」の人として、私たちは「箸」という食文化を使いこなし、器用に美しく、今年の「冷麦」をいただきますしょう。

地

冷麦のいわくありげな太さかな

路生

「冷麦」の特徴である「太さ」に焦点を合わせた句は沢山ありましたが、金曜日に推したいのはこの作品です。「いわくありげな」という中七のフレーズの面白さ。なんでこの「太さ」が「冷麦」？という素朴な疑問が、そのまま「いわくありげな」一句になりました。

冷麦に寂しき芯の残りけり

三島ちとせ

これも太さから発想した句の一つですが、「寂しき芯」という詩語が「冷麦」らしさを表現しています。いつもの索麺のつもりで茹でてみると、ほんの少し「芯」が残っていたという事実もまた「冷麦」らしい側面です。「寂しき芯」には、作者の寂しき心も投影されています。

喪歸りの冷麦啜るだけの意気

登美子

親しい人のお葬式か、儀礼的な意味で参列した葬式か。亡くなった事情、家族の悲嘆に触れるだけで、参列する者の心も萎えます。涙も出ます。そんな「喪歸り」の昼時、このままの気分を持ち帰ってもいかん、何かを食べて力を出さねば、と啜る「冷麦」。索麺の細さではなく、「冷麦」のささやかな太さが力となってくれるような気がします。「冷麦啜るだけの意気」という言い回しの巧さに感心します。

冷麦や親戚なれど名を知らず

大雅

「親戚」が集まるといえば、結婚式もありますが、「冷麦」ですから、葬式か、法事かを思うのが妥当でしょう。「親戚」だというのは知ってるけど、「名」までは知らない間柄。いつもの索麺ではなく、ちよっ

と改まった気分を「冷麦」に感じ取ってる作者の状況に、アルアル感の共感一票！

昼の部を終え冷麦の楽屋かな

豆蘭

「昼の部を終えて」ですから、夜の部もあるのでしよう。「昼の部」は大盛況。満足に演じ終えての昼餉。夜の部に備えて、たらふく食べるのは憚られるが、力は付けておきたい。そんな場面の食べ物として「冷麦」はハマリ役の一品です。冷たい「冷麦」の喉ごしが爽快な「楽屋」であります。

冷麦食う明日の供花の匂ふ夜

すな恵

別な意味で力をつけなくてはいけない「夜」もあります。「明日の供花」という措辞だけで、葬式前夜であることが分かります。物を食べる気にもならないが、「明日」のためにとにかく食べねば……という思いが「冷麦」を選んでいるのです。生きて「食う」ことの無残を嘆みしめる作者に、「供花」は無残にも美しく「匂ふ」のです。

昼蘭くや冷麦食ふも億劫な

とおと

真夏の懈怠を詠むこともまた、逆説的な意味で夏の季語「冷麦」を表現する術となります。なんといつても「昼蘭くや」という上五が巧いですね。「や」は「蘭く」という状況を強調。けだるい夏の「昼」、これなら食べられるかと茹でてみた「冷麦」を食べることさえも「億劫」だということです。下五「億劫な」と呟いた余白に、夏の懈怠が漂います。

ひやむぎや畳が灼けてゐて狭い

クズウジュンイチ

食べ物をごこまで不味そうに描けるのも一つの才能だよなと、苦笑いしつつ読んだ一句。「ひやむぎ」と平仮名で書くだけで、なにやら温い感じがして

くるのも、作者の狙いどおりの効果。「畳が灼けてゐて」と視線を落とし、「狭い」と見回す視線の誘導もまた手練れのテクニクです。

ひやむぎやむの穴ほどの太さなり

石川焦点@そうめんはめの穴ほどの太さなり

平仮名で「ひやむぎ」と書くのにも、色々なケースがありますが、これはカタチの愉しさ。「ひやむぎ」と書いた、その「む」の一字にある「穴」ぐらいの「太さ」の「ひやむぎ」ですよ、と笑う一句。「太さなり」と断定したところに、俳諧味が生まれます。蛇足でもある、アットマーク以下も、ふふふと笑えました。

冷麦のチエリーみかんを無礼討ち

雪つさぎ

以前、誰の句でしたっけ？ 索麺だか冷し中華だかにのつかつて「チエリー」の句があつて、大いに笑わせてもらったんですが、ほんのちよつと太く、ほんのちよつと改まった感じがしないでもない「冷麦」ともなると、「チエリー」と「みかん」が飾られてるんですね?! こんな「冷麦」なんて言語道断だとムツとする作者の思いを、下五「無礼討ち」と表現する愉快。このユーモアが俳人という人種の愛すべき特性でありますね。

第149回 2016年7月18日週掲載

つきみそう

月見草

天

つきみそうりコーダーならうの音だ

ひろしげ8さい

本当の「つきみそう」は黄色ではなく、白い花

で時間とともに色を変えていく、いかにも儚げな花であることを知ると、猶更どころが揺らぎます。

一句「誂ハツとしました。「つきみそう」を「リコーダー」の音に喩える発想はもちろんですが、「ラの音」という感覚にハツしたのだと思います。「リコーダー」の柔らかな音のイメージだけだと、季語「つきみそう」の持つ美しい負性を表現しきれませんが、音階の中の「ラの音」にはかすかな翳りがあるように感じられます。音楽の授業の聴音で、ドミソの和音とドファラの和音は、なんでこんなに気分が違ふんだらう？ と思ったことがあります。作者ひろしげ8さいの心を似たような思いが過つたのかもしれない。

聞くところによると、沖繩の音階にはレとラの音がないのだそう。ドミファソシドの音階で紡がれる沖繩の歌の持つ懐かしさや温かみは、音の成分にも要因があるのかなと思います。

「つきみそう」を「リコーダー」の音階に喩える「ラの音だ」という詩的断定は、さざ波のような淋しさそして憂いとなって、読者の心に寄せては返します。「ラ」という音への感性、「つきみそう」の儚さへ寄り添う心、それらが八歳の少年の心を通して、こんな詩語となって結実していることに静かな感動を覚えます。

地

星屑のやうな飛行機月見草

ぎんやんま

「星」と「月見草」を取り合わせた句は、沢山寄せられました。その中で、これを金曜日に推したのは、「星屑のやうな飛行機」という素直な実感です。深い夕闇の中で点滅する「飛行機」の灯りが「星屑」であれば、「月見草」は地に咲く「星屑」なのかもしれません。

月見草艇庫に眠る銀の笛

「月見草」の咲く道は「艇庫」の扉へ続いているのでしょうか。「艇庫」のどこかに「眠る」のは「銀の笛」。ボートの練習に使われる笛かもしれないが、何か特別なチカラをもった笛のようにも思われます。「艇庫」の一語が持つ水辺のイメージが、水面の月影に揺れる「月見草」を想像させます。

井戸水の洗顔清し月見草

谷山みつこ

朝になって萎んでしまう「月見草」を描いた句もありましたが、この清々しい作品を金曜日におすすめではないられません。中庭か裏庭か、「井戸」の小さなポンプを押せば冷たい水が一気に吐き出されます。手に掬った水の冷たさ。「洗顔清し」と腰に挟んでいた手拭で顔を拭えば、傍らには昨夜の「月見草」が色を変えて萎んでいるのでしょうか。朝の「月見草」もまた粹な味わい。

静かなり象のしつぽと月見草

Mコスモ

上五で「静かなり」と断定しつつ、「静か」なものと「象のしつぽ」と「月見草」を並べています。大きな「象」の小さな「しつぽ」も、その傍らに咲く「月見草」も「静かな」夜の中で、静かに揺れているのでしょうか。絵本のような美しい光景です。

月見草硝子は吹いて膨らまず

神谷たくみ

「月見草」の儚さを「硝子」の素材に喩える発想もあるかとは思いますが、「硝子は吹いて膨らまず」という一種当たり前のことを述べることによって「月見草」の美しさが表現され得ることに、ささやかな感動を覚えます。「硝子」は吹いて膨らませる、そして「月見草」は誰かの切ない思いによって膨らみ、咲き、萎む……のかもしれない。

なりません。月見草にも論される

江口小春

俳句における句読点は特殊なテクニク。この場合の「なりません。」は誰かの科白であることを明示しつつ、カギカッコであらわされる会話とは違ったニュアンスを表現します。

「にも」は散文的になりがちな助詞ですが、「月見草」以外の何者か「にも」という意味が、一句の肝うまく使いこなしています。道ならぬ恋でしょうか、放浪の誘惑でしょうか。さまざま「なりません。」が、次々に浮かんできます。

大脳に微かな発火つきみそう

酒井おかわり

「つきみそう」という美しくもあり、妖しくもある花を見ていると「大脳」の中のどこかが「微か」に「発火」していることに気づくというのです。詩的感覚のみでできている句ですが、「つきみそう」という存在の不思議は、詩人たちの脳をこんなふうに刺激するのだなあと、妙に納得した次第です。

メキシコも火星も遠し月見草

亀田荒太

暑く乾いた土地のイメージを持つ「メキシコ」と赤い星というイメージを持つ「火星」。冷ややかに白く咲く「月見草」との取り合わせに意外性があり、これらを取り合わせるによって生ずる言葉の火花が、まさに詩であります。「遠し」の一語によって生まれる詩的遠近感も豊かです。

紅白饅頭の餡は闇色月見草

比々き

「紅白饅頭」の「餡」を「闇色」だと断定する発想にも驚きましたが、「月見草」にこのフレーズをぶつけてくる感覚も凄い！「紅白饅頭」が割れて「闇色」の「餡」が現れ、それが夜の「闇」となり、闇の中から「月見草」がニョキニョキと咲き広がって

五月雨

さみだれ

第150回 2016年8月1日週掲載

天

五月雨の砂場にヒーロー刺さったまま 初蒸気

「五月雨」と「梅雨」、これも似て非なる季語です。どちらも仲夏の天文の季語ですが、「梅雨がその時候を含むのに対して、(五月雨は)雨そのものをさす」と『新日本大歳時記』(講談社)には解説してあります。

ならば、雨そのものが映像として見えてくるものを、今週の「天」に推そうと考えていたのですが、この句が次第に味わい深く思えてきました。正直なところ、雨の砂場に残された遊具やおもちゃを描いた句はよく見るのですが、述べ方の工夫によってオリジナリティを確保できるのだなあと、その点にも感心しました。

上五は「五月雨の」と下の語へ続いていきます。「五月雨の砂場に」何があるのだろうと思ったとたん出てくる「ヒーロー」の一語。子ども同士で「ヒーロー」と呼ばれている子なのか、子ども番組の戦隊モノの「ヒーロー」なのか(ロケでもしているのか)、比喩的意味の「ヒーロー」なのか。読み手をささやかに翻弄しつつ、下五「刺さったまま」という措辞によって、読み手の心は一瞬ドキッとします。「刺」の一字のイメージが不穏な気分を起こすのだらうと思います。が、ちゃんと読めば、玩具の「ヒー

ロー」であることが分かります。ガンダムロボットの、アンパンマン、仮面ライダー、鉄人28号(古いかう笑)が、突き刺さったまま「五月雨」に濡れているのです。

「五月雨」の情緒や雰囲気を裏切る「ヒーロー」という言葉。「刺さったまま」という即物的表現が「ヒーロー」という存在の孤独を想起させるのでしょうか。光景を描写しつつ、寓意を表現しているようにも思えてくるのですが、この句の味わい。切れない型や下五字余りもまた、降り続く雨の気分似合います。

地

空の膜たやすく溶けてさみだる 矢野リンド

「空」に「膜」があつて、それが容易く「溶けて」しまうから、五月雨が降るのだよという一句。「空の膜」という発想が「さみだれ」の語感に似合います。「さみだる」は、「五月雨」が動詞化した「さみだる」の連体形。意味が循環して、上五に戻っていくような印象になります。

水かきのあらばさみだれ楽しからむ くらげを

「水かき」があつたとしたら、という空想が楽しい一句。「あらば」は仮定の意味を表します。「さみだれ」を平仮名で書いている点も、明るい印象。「楽しからむ」とあれこれ想像することを、作者も読者も共に楽しめる作品です。

五月雨や豚をきれいにして殺す クズウジュンイチ

「五月雨」の情緒や雰囲気を裏切る発想は、当然でてくるのですが、こんな方向に裏切ってくるとは、さすがはクズウジュンイチです。「五月雨」

という美しい名をもつ雨によつて洗われた「豚」たちが次々に殺されていくかのような妄想が、読者の脳内に広がります。長く降り続く雨の無常、「きれい」という言葉の無残が、心に突き刺さる一句です。

五月雨や膿んでおるのか革靴は 竹田虎徹

中七下五のため息まじりの実感に、読者の大いなる共感が集まります。雨でぐちゃぐちゃに濡れた「革靴」を「膿んでおる」と感じとつた発想に拍手。最初、「梅雨」でもいいのでは?とも思ったのですが、いやいや、雨そのものを指す「五月雨」だからこそその実感なのだと納得した次第です。

一体と数へらる五月雨の帰宅 あらあらた

「一体」という数え方が何を意味するのか、ハツとします。「一体と数へらる」という措辞が、「五月雨の帰宅」全体に掛かつていくと読みたい構造。遺体となつて「帰宅」する肉親への思いが、濃く滲む一句です。

千人を容れて原爆館さみだる ジャンク洞

こちらの「千人」は、「原爆館」を見学している人たちでしょうか。それとも「原爆館」に写真として展示されている人たちでしょうか。「容れて」の文字が想像をかき乱します。「原爆館」を包むように慰めるように五月雨は降り続くのです、「さみだる」のです。

五月雨の川に小石と寂しき目 Mコスモ

「五月雨や」で切らず「五月雨の」と書けば、「五月雨の川」と限定する意味になります。「五月雨」の降り続く「川」にある「小石」を見つめる作者。「小石と寂しき目」と並列で置かれた「寂しき目」は

誰の目なのでしょう。「小石」という無機物と並べられることによつて、この「目」は灰色の寂しさを湛えているかのようです。

さみだれや眼玉乾るまで観る春画 関野無一

「乾る」は「ひる」と読みます。「さみだれ」を裏切るという意味では、見事な裏切りです。「さみだれ」が降り続く日、取り出して観るのは秘蔵の「春画」。しかも「眼玉乾るまで」というのですから、可笑しい。「さみだれ」の湿度、「眼玉」が乾くほどの熱心。いやはや、やられました。

五月雨や幽霊館を舐めてみる 雅紀

「幽霊館」って何だろうと思つて調べてみました。「幽霊子育館」という館が、京都で売られているのだそうです。毎晩のように女の幽霊が現れて、子どものための館を買いに来るという出来事があった?怪談?があるようです。「五月雨や」という詠嘆の後に出てくる「幽霊」という言葉の湿っぽさ、それが「幽霊館」だという意外性。恐る恐る「舐めてみる」という味覚の謎も、一句の隠し味です。

第151回 2016年8月15日週掲載

もすにえ 鴉の糞

天

体液に枝濡れてゐる鴉の糞 ポメロ親父

「鴉の糞」という季語に初めて遭遇した時、嗚呼これが!とささやかな感動を覚えました。残酷だとか気味悪いとかそういう感情ではなく、生身の季語に出会っているのだという一種の感動でした。

この「鵲の賛」は、ついさつき刺されたばかりのもの。「枝」を濡らしているのが「鵲の賛」の「体液」だと分かった瞬間の、作者の心に走る俳人的衝動に共感いたします。

秋暑の太陽が照りつける「枝」、時折びくりと動く脚、静かにゆつくりと滲み出てくる「体液」、その「体液」が濡らす「枝」、樹皮のテラテラとした光を、作者はひるむことなく観察し続けます。

このような場面に遭遇し、それを一句にしたい衝動に突き動かされる時、へたな感情は一切排除したほうが良いかと思います。淡々と目の前にある光景を描写することができれば、読者の脳裏にも全く同じ光景が再生されます。描写に徹することで、完璧なりアリティを手に入れられれば、己の感情を述べる言葉などは全く必要ないのです。

やがて「鵲の賛」の表皮が少し乾き始め、脚はびくりとも動かなくなる頃、数十句が書き付けられた句帳を手し、作者は季語の現場を離れるのでしよう。「鵲の賛」という季語の力に対する真摯な態度が滲み出る作品です。

地

鵲の賛少し動いて乾きけり クズウジユンイチ

普通、俳句で「少し」なんて言葉は三音足りない時の埋め合わせに使われたりするものですが、この一語が一句の中でちゃんと機能している句に目に掛かることは稀です。が、この句の「少し」はまさに描写の言葉。先ほどの天の句の延長線上に、この状態があるはずで。

「少し動いて」いるのは脚でしょうか、尻尾でしょうか、はたまた眼球でしょうか。「乾きけり」というぶつきらばうな下五が、淡々たるリアリティを

表現。この作者も「鵲の賛」を観察し続けた経験があるに違いありません。

またそらを濡らして縮む鵲の賛 緑の手

天の句は、「鵲の賛」の「体液」が「枝」を濡らしていましたが、こちらの句は「鵲の賛」の存在が「そら」を濡らすかのように乾いていく、つまり「縮む」光景を描きました。先ほどの、三音足りない時の「少し」と同様に、二音足りない時の「まだ」「ふと」もよく目にするのですが、この句の「まだ」はちゃんと機能しますね。

小さな「鵲の賛」の水分が「そら」を濡らせるはずはないのですが、「またそらを濡らして縮む」という詩語は、「鵲の賛」を表現する詩的真実として、読み手に投げかけられています。

速賛やけたけた笑ふやうに脚 ウェンズデー正人

「鵲」の傍題にある「鵲の賛」は、さらに「速賛」とも呼ばれます。この句の工夫は中七から下五にかけての擬人化。「けたけた笑ふ」で誰かが笑っているのかなと二瞬思うのですが、「やうに脚」という措辞によって、まさに「脚」が見えてきます。私は、乾いたカエルの「脚」が風に揺れているさまを想像しました。擬人化の表現が、そのまま形状の描写に転化している点が、確かなテクニクです。

火山灰積もり乾ぶる脚や鵲の賛 田中憂馬

さまざまに「鵲の賛」の「乾ぶる脚」を見せてもらった今週でしたが、「火山灰」が降り積もる地の光景に凄みがあります。広い光景を思わせる「火山灰」から「脚」へのズームアップ。さらにそれが「鵲の賛」だと分かるサイズへと画面が切り替わるあたりのカメラワーク、巧いなあ。

長きもの垂れて月下の鵲の賛 比々き

実に印象的な光景です。「長きもの垂れて」は具象と抽象のはざまにある言葉ですが、後半「月下の鵲の賛」によって、みるみるうちに具象へと焦点を合わせてくる。実にニクイ展開です。

「月下の鵲の賛」は、暗いシルエットとして読み手の眼前にあり、月に冷えているかのような虚の感触を読み手に与えます。これも天に推したかった作品の一つです。

鵲の賛ほとびにけりし橋のうへ

夜市

品詞分解をすると「ほとび／＼に／けり／し」となります。「ほとぶ（潤ぶ）」は、水分をふくんでふやけること。「ほとびにけり」は、「ふやけてしまった」というニュアンスです。が、さらに「し」（＝過去の助動詞「き」の連体形）が添えられていますね。ただこの助動詞を存続の意味で使うケースもあり、俳句界の論争の一つにもなっております。

この句にとつて、どちらの読みがシアワセかと考えた時、存続の意味で読むのがよいかと思えます。干からびていた「鵲の賛」が「ほとび」てしまったのは、驟雨でしょうか、野分の雨でしょうか、滂沱たる朝露でしょうか。干からびた「鵲の賛」を詠んだ句が多い中で、たしかにこのような光景もあるなと思わせるオリジナリティとリアリティ。下五「橋のうへ」がさらに光景を確かなものにします。川風を感じる「橋のうへ」、岸から突き出した枝に「鵲の賛」も揺れています。

ご隠居の狎見上げをり鵲の賛

フラ点子

猫が「鵲の賛」を見上げているという句は、時折お目に掛かりますが、犬、しかも「狎」と具体的に書いた点がいいですね。「ご隠居」が可愛がっ

啄木鳥

「啄」にとつて、「鵲の贅」は不審なモノとして映るのでしょうか、それともビーフジャーキーみたいな美味しそうなモノとして「見上げて」いるのでしょうか。俳味のある作品。

鵲の贅ヴィシソワーズのまだぬるく

ぐわ

「ヴィシソワーズ」とは、ジャガイモの冷製ポタージュスープ。「まだぬるく」ですから、冷やし方が足りなかったのか、冷えている途中なのか。

私は、出された「ヴィシソワーズ」が「まだぬるく」、多少の違和感を感じていると読みました。窓の外、視界の端にあるのは「鵲の贅」。その生乾きのフォルムと生温い「ヴィシソワーズ」とのかすかなる接点。フランス映画のワンシーンのようなセンスを味わいたい作品です。

一概にそうとも言えず鵲の贅

大塚めろ

「一概にそうとも言えず」という不可解な呟き。何が「一概にそうとも言えず」なのか、読み手は思考の迷路に入っていきます。「鵲の贅」という不可解なモノは、全ての不可解に向かつて触手を伸ばしていくかのよう。以下の、俳文とともに味わうのも一興です。

● 柚子の棘に突き刺さっている雨蛙は、こんな位置にどうやって鵲が突き刺した？と捜査二課も首を傾げる神出鬼没さです。油断していたら目の前に突然現れます。雨蛙が着地に失敗して突き刺さったと理解したほうが自然な遺体も結構有りります。／大塚めろ

天

啄木鳥や鋸の歯は熱を持ち

山香ばし

「啄木鳥」と木樵を合わせた句は沢山届いたのですが、「木樵」という言葉を使わずにその場面を表現した点に工夫があり、「鋸の歯」に焦点を絞った点も巧い展開だと思います。

この「鋸」はチェーンソーのような電動のものではなく、昔ながらの「鋸」ではないでしょうか。人の力が引き起こす摩擦熱が、ここまでの「熱」となり得るのか、というささやかな驚きを一度経験すれば、今自分が使っている「鋸」がどのくらいの「熱」を持っているか、想像できるようになります。「鋸」を引くという動作の強弱が「熱」の量に転化される。そこに「鋸」を使う実感も生まれます。

「啄木鳥」は木の幹を叩き穴を開けます。中七下五は「鋸の歯は熱を持ち」としか述べていませんが、ひよっとすると「啄木鳥」の嘴も「熱」を帯びているのではないかしらと、そんな思いも広がります。最後を「持つ」と終止形で言い止めず、「持ち」としたのも、そのような効果を意図しているのでしょうか。

「啄木鳥」の木を叩く音と、人が「鋸」を使う音。読み手は一句の世界に共存する二つの音を感じ取っていますが、言葉の上では「音」という語が使われているわけではない。そこも、作者の大いなる工夫でありましょう。

地

真つ直ぐな木だから叩くけらつつき

ちやうりん

林や森で「けらつつき」に出会う度に、確かに、なんであんな垂直な木に止まってんだろ？と可笑しくなります。そんな率直な感想を逆転させると「真つ直ぐな木だから叩く」という詩語となるわけですから、発想とはいかようにも広がっていくものなのだなあと、楽しくなります。

啄木鳥の今樹の皮を抜けた音

大塚めろ

幹を突く「啄木鳥」になりきることができなのが、この作者の能力だとつくづく思います。たつた今「樹の皮」の層を突き抜けたと分かる。嘴の感覚や「音」の変化で感知できるのでしようね。読み手である私も、まるで「啄木鳥」になったかのような、嘴の感覚を追体験させてもらいました。

啄木鳥敲く木屑光となりて散る

香壺

何度目かに「啄木鳥」を見た時、「光」が小さな粒のように降っているのに感動したのですが、よく見るとそれが「木屑」であることに気付きました。「啄木鳥」が突いた木の屑がしずかに降っていく光景。「木屑光となりて散る」は、まさに私の見た光景を見事に言葉で切り取っている中七下五です。

啄木鳥のふと夕陽見る五秒間

このはる紗耶

「啄木鳥」って、一心不乱に幹を突いているかと思うと、ふいに動きを止めてじっとするんですね。この句を読んだとたん、そうか、「啄木鳥」は梢から見える「夕陽」の美しさにうつとりしてるとんだと納得がきました。「五秒間」という時間もなんだ

か絶妙なりアリテイでありますね。

きつつきと木を切る音ときつつきと とりとり

「きつつき」という生き物が発する音は、「啄木鳥」という季語の重要な成分。上から読んでも下から読んでも「きつつき」と読める言葉遊びの楽しさを、こんな形で表現するのもあり！ですね。声に出して読んだ時のリズムやメロディーを考えることは、韻文としての俳句にとって大変重要な要素です。

小げら小げら木うら木おもて木霊追ひ めいおう星

これもリズムを考慮した作品。「小げら小げら」のリフレイン、「木うら木おもて」という言葉遊び、最後に「木霊追ひ」と広がる音の詩的リアリティ。軽やかにして、奥行きのある一句です。

同時投句「啄木鳥と黒鍵音楽室に募る雨意」は材料の多い句ですが、見事に作品として敲きあげていることに感心します。

● ずっとおもやもやしていたものが、投稿最終日にやっと形になりました。／めいおう星

北ホテル啄木鳥は荷を解かぬうち 葦信夫

なんて清々しい光景でしょう。似たような光景を描いた作品もあったのですが、「北ホテル」という名前がさりげなく、かつ、ぶつきらばうでいいなあ。

試みに、ほぼ同じ意味となる「啄木鳥やまだ荷を解かぬ北ホテル」と比較してみると、掲出句の良さが際立ちます。「啄木鳥は」の「は」という助詞が、季語「啄木鳥」を見事に主役として描いていますね。下五「解かぬうち」という終わり方も余情を拡げ、その余白の中に「啄木鳥」の音が響き渡ります。

コツヘルの湯沸き啄木鳥めぐりけり うしうし

「コツヘル」とは、携帯用の鍋や皿、釜が組になったもの。今日はこの辺で野営しようと、荷を解き、テントを張り、火を起し、「湯」が沸いてきたところなのでしよう。「コツヘルの湯沸き」という前半の措辞で、状況が手に取るように分かります。

さらに後半の「啄木鳥めぐりけり」という表現もさりげなく巧いですね。あっちの梢で木を叩く音がしたかと思うと、別の方角から「啄木鳥」の音が聞こえてくる。作者のいる位置を中心として「啄木鳥」の音が聞こえるさまを、きちんと描写できています。

第153回 2016年9月12日週掲載

ごま 胡麻

天

胡麻爆ぜて晴天続く二十日間

木好

実に悩ましい兼題だった「胡麻」です。植物のジャンルに入る季語なんだけど「胡麻刈る」「胡麻干す」「胡麻叩く」など人事生活のジャンルに入る季語たちと切っても切り離せない。実際に様々な歳時記を調べてみると、植物「胡麻」の例句として「胡麻刈る」「胡麻干す」「胡麻叩く」などの句を収録しているものもあります。

さらに「胡麻」という食品になってからの「胡麻」は季語としてどこまで機能するのか。「新胡麻」ならば季語の力はあるが、胡麻豆腐「胡麻油」のように完全に別の食物となっているものはどうなるのか。皆さんが疑問に思い、困惑したのと全く同じようにワタクシも大いに困惑しました。

困ってるだけじゃ話にならないので、私なりのラインを引いてみました。①並選、「人」選までは人事生活としての「胡麻」の句も許容する。②傍題に「新胡麻」があるように、食物としての「胡麻」は季語として尊重する。③「胡麻豆腐」「胡麻油」系の句は、その作品の出来によって選する場合もあるが、基本的には季語としての力は弱いと判断。

さあ、この基準に従いつつ、悩みに悩んで「天」にいただいたのがこの句です。「胡麻爆ぜて」は、炒って爆ぜるではなく、植物として実が熟して爆ぜる状態ですね。胡麻は、茎の下から上へ向かって開花する、その順に実が熟していく。ま、これは当たり前のことですが、下部の実が2〜3個弾けだすと、すぐに刈り取りを始めるのだそうです。

いよいよ「胡麻」が爆ぜ始めたよ、こここのころ続いている「晴天」が今年の「胡麻」の生育をぐんとよくしてくれたに違いない。「二十日間」の晴天は恵みの天候。さあ、刈り取りを始めるか、という声が聞こえてくるような作品です。「胡麻」という植物は、「早魃に強く、生育後期の乾燥にはたいへん強い」のだそうです。刈り取りが近づいた頃に、雨が多いと生育は悪くなります。「晴天二十日間」は「胡麻」にとっては最高のお天気。「胡麻」の花の美しさ、「胡麻」の実の存在感、それらを日々眺めている人だからこそ「晴天続く二十日間」という措辞ではないかと思うわけです。この「晴天」に感謝をしつつ、今年の収穫を喜びましょう。

地

庭先の胡麻はじけたり風は青

b e

「庭先」に植えている「胡麻」が「はじけ」る瞬間を観たのでしょうか。この「胡麻」は収穫とい

うよりは、俳人の趣味で植えているかのような味わい。下五「風は青」が「胡麻」の花が咲いてから実となるまでの時間を楽しんでおられるかのよな作品です。

胡麻はぜておどける程に軽き風

時雨

「軽き風」によって「胡麻」が「はぜ」たのでしょか。「おどける程に」という擬人化が嫌味なく一句の世界を作っています。語順に工夫があり、最後の「軽き風」によって「おどける」という擬人化を十七音に溶け込ませています。

袋背負へば打ちたての胡麻の熱

櫛の木

「打ち」という言葉がありますから、人事のジャンル「胡麻打つ」に入るかとも思いましたが、「打ち立ての胡麻の熱」という展開は、まさに植物から食物の「胡麻」に変容したところでしよう。「袋背負へば」ですから、趣味の栽培ではなく農作物としての「胡麻」。背中に伝わる「胡麻の熱」は、生きている食物の力であり、収穫の喜びであり、太陽の恵みでもあるのでしょう。

すり鉢を初めは胡麻の逃げ回る

妹のりこ

こちらは食物としての「胡麻」ですね。「すり鉢」に入れた「胡麻」は、「初め」のうちは摺り粉末の先を逃げようとしています。「逃げ回る」も擬人化の言葉ですが、俳諧味のある表現としてこなれています。「初めは」と述べることによって、そのうちに潰れてくる「胡麻」や摺り粉末の音の変化も想像できます。

摺り始むる胡麻の一粒類撃ちぬ

このはる紗耶

「摺り始むる」時のアルアル感いっぱいの一句。「胡麻」の小さな「一粒」に対して「類撃ちぬ」とす

る一種大げさな表現にリアリティがあります。不意打ちの驚きというのでしょうか。「胡麻」の香りもますます立ち上ってきます。

社説閉づ中々噛めぬ胡麻だこと

牟礼あおい

朝刊を読んでいるシーンでしょうか。「朝刊」と言わず「社説」と具体的に述べたところがよいですね。テレビ欄ではなく「社説」を丁寧に読んでいることで、この人物像も見えてきます。しかも「中々噛めぬ胡麻だこと」という言葉尻のニュアンスからして、女性かなという想像も膨らんでいきます。

胡麻は実に大黒さんのきれいい好き

直木葉子

「藤は実に」なんて季語もありますが、「胡麻は実に」という時間経過を含む季語の使い方はなかなか難しいのです。でも、この句はさりげなく巧いですね。「胡麻は実に」なる頃を迎えたよ、この寺の「大黒さん」はいつも通りの「きれいい好き」。庫裏、本堂、境内の隅々まで実に丁寧に掃ききよめておられる。

「胡麻」は、僧職の皆さんにとって元々なじみ深い食物。精進料理に欠かせないものでもあります。「大黒さん」の育てる「胡麻」は、今年もたくさんの実を付けているのでしょうか。

肉食を断ち金色の胡麻を摂る

ジャンク洞

「肉食を断ち」という措辞から僧職にある方々を想像しました。栄養分として足りない部分を「胡麻」という食物から脂質やタンパク質を補う。黒や白の胡麻もありますが「金色の胡麻」という色のイメージも豊か。「摂る」の一語の選択も確かです。

星の降り胡麻畑熟れ激戦地

土井探花

「星の降り」で夜だと分かり、「胡麻畑」で光景が広がり、「熟れ」で状況が分かります。ここまでだとありがちな表現で終わるのですが、下五「激戦地」でハツとします。かつての戦争では「激戦地」であったこの地に、今は「胡麻」が熟れている。胡麻は、早魃にも強い作物。「胡麻」も人々も「星降る」夜を静かに眠っているのでしょうか。

胡麻爆ぜて王土は一夜にてほろぶ

とおと

「胡麻」が実を弾かせることからの発想かもしれませんが、たかが「胡麻」という季語から「王土は一夜にてほろぶ」という詩語へジャンピングするこの作家の発想に驚きます。「王土」とは、文字通り王が治めている領土。「王土」が「一夜」にて滅びるということは歴史上いくらでもあることです。が、「胡麻爆ぜて」の小さな爆発が、「王土」の滅亡という大きな爆発となる。いやはや、これも「天」に推したかった作品です。

第154回 2016年9月26日週掲載

秋薊

あきあざみ

天

沢水の洗顔痛し秋薊

篠田ピンク

「秋薊」という種があるのではなく、秋に咲く薊全般を指すのが、季語「秋薊」なんです。元々「薊」は春の季語であり、「夏薊」「秋薊」とそれぞれの特徴を把握していくのは、なかなか難しい要求です。他の季節ではない「秋薊」の特徴は？……となれば、「秋」の一字の爽やかさであ

り、秋冷であり、ささやかな寂寥感めいた感情で
ありましょうか。

掲出句、「沢水」にて「洗顔」している状況
が、一句の世界となつて立ち上がってきます。「沢
水」という場所情報に加え、「洗顔」の一語によつて
前夜はこの「沢」の近くで野営したのではないかと
想像できます。野営の朝を迎えての「洗顔」を、
「沢水の洗顔」という言葉で端的に表現したのが鮮
やか。巧いなあと感じます。

さらに「洗顔」の感覚としての「痛し」のリア
リティ。この一語が、春の「薊」でもなく、「夏薊」
でもない、「秋薊」という季語の本意と呼応します。
最後に出現する「秋薊」は、具体的な種ではなく、
「秋」に咲いている「薊」という漠然とした、この
季語の特性をうまく表現しています。朝の清澄な
空気、「洗顔」の「水」の感触。野営の現場をこれ
だけの言葉で切り取れていることに、爽やかな感
嘆を覚える一句です。

地

秋薊挿され牧場のミルク缶

雪うさぎ

この「秋薊」は丈の高い薊なのでしょう。「牧場」
で使っていた古い「ミルク缶」に飾っているのでは
ないかと思えます。「秋薊挿され」から「牧場」へ
と光景が広がり、そのあと一気に「ミルク缶」へと
焦点が絞られ、再びそこに「挿され」ている「秋薊」
が立ち上がってくる。鮮やかな構造の作品です。

山彦を山へ返して秋薊

一走人

「山彦を山へ返す」とは、ヤッホーの声。山から
山へと響き渡っていく声が一句の世界に広がります。
眼前には「秋薊」が丈高く咲いています。「山彦」

を受け止める「山」の背後には、美しく青い秋空
いかにも「秋」らしい光景です。

こごとく雨つぶ砕く秋薊

中原久遠

「こごとく雨つぶ砕く」とは何だろう？と思つ
た瞬間に出現する「秋薊」という季語。「秋薊」の
花のトゲトゲ、棘のトゲトゲに、無数の小さな雨
粒が光ります。「砕く」という動詞の一語に、野生
の猛々しさも垣間見える。見事な動詞の選択です。

高みより岩くだる水秋あざみ

ららやにほ

当たり前のことですが、俳句は頭から読んでい
きます。「高みより」という方向、「岩」という光
景、そこから「くだる水」と、一連の言葉が見上
げる岩肌を伝って流れる「水」のさまを鮮やかに
再現します。こんな「水」の近くに咲く「秋あざみ」。
走る「水」は、まさに爽やかな秋の水。秋らしい
冷気も感じる作品です。

秋薊の群生過ぎてあと五分

小田寺登女

「あと五分」という表記でもいいかなとは思いま
すが。「あと五分」の実感に共感します。「秋薊の
群生」を見つけた歓声、「あと五分」だよと励まし
の声を掛け合う仲間もそこにはいるのでしょう。

一句に時間の経過を詠み込むのは難しいテク
ニックですが、さらりと無理なく書けている点も
誉めたい一句です。

地形図の広がる火口秋薊

三島ちとせ

事前の準備として確認していた「地形図」とそつ
くりな光景が目のある、ささやかな感動を「地
形図の広がる火口」と表現したのだろうと読みまし
た。「火口」をのぞき込むかのようなアングルも見

えてきます。「火口」の風に吹かれているのは「秋薊」。
「地形図」の中に鮮やかに存在し始める「秋薊」です。

隧道へひとり遅るる秋薊

とおと

地味な一句ですが、光景がありありと立ち上がつ
てきます。ぼつかりと暗い「隧道へ」と進んでいく
仲間たち。「秋薊」の美しさに立ち止まっている人物。
「隧道へひとり遅るる」というささやかな時間の描
写が巧いですね。「ひとり」遅れて「隧道へ」と歩
き出す人物から、「秋薊」へと焦点を移す映像Ⅱ語
順も効果的です。

鬼あざみ揺らして奥にいる何か

とりとり

こちらは「鬼あざみ」ならではの一句。猛々し
い棘だらけの「鬼あざみ」が風ではない揺れ方を
しているのでしょうか。その「奥」に一体「何が」い
るのか。読者の視線も、じーっと「鬼あざみ」に
そそがれます。「鬼」の一字が、さらなる妄想とか
き立てる一句です。

第155回 2016年10月24日週掲載

湿地茸

しめじ

天

湿地茸生う同胞多き大穴牟遅神

笑松

「湿地茸」は植物の季語。とはいえ調べてみると、
ホンシメジ、ブナシメジ、ヒラタケを含んだ総称
だということはありませんか。実にめんどくさい季
語ではありませんか。

勿論、食物として、シメジ飯、シメジ汁等を詠
むのもあり！ですが、「天・地」には植物として詠

まれている作品を推そうと、選者としてのキヤッチャーミットを構えておりました。

そこに飛び込んできたのが、「大穴牟遲神」という神様の名。正しくは「おおなむちのかみ」あるいは「おおあなむちのかみ」と読むようですが、^{あはらのみかみ}大王神の別名だそうです。記紀神話では、葦原中国を支配した神です。「同胞」とは、母を同じくする兄弟姉妹、一般的に兄弟姉妹という意味でも使われる言葉です。

「湿地茸」がくつついてポコポコ頭を並べている様子から、沢山の子どもを想像する句はほかにもありましたが、そこから記紀神話の時代へワープしてしまう発想が見事。さらに一句全体を読み通してみると、ちゃんと「湿地茸」の様子が見えるつくりになっているあたり、巧いものだと思え惚れ惚れします。

「湿地茸」の集まった頭の大小は、生まれ出づる神々のようでもあり、「湿地茸生う」その場所は、かつての葦原中国のような湿り気を思わせ、「しめじ」と「おおむなじ」の付かず離れず音の面白さもまた、一句の隠し味というべきでしょう。「湿地茸」で取り合わせの句を作ると、至難の業やろ……と思つたので、作り手としての意志の置き所にも感服した次第です。

地

石づきに湿地ふたたび生えそうな

石川焦点

分かる分かる！という一句。他の茸でもいえるのでは？という人もいるだろうけど、いやいや「湿地」の大きさと「石づき」のカタチとかが、「ふたたび生えそうな」という実感になつてると思うのですよ。あ、この「湿地」は本シメジとかじゃなくて、

ブナシメジの気分です。

湿地茸裂く湿つた龍のほひして

ことまと

あの「にほひ」は何に似てゐるんだろう？と思つてたんですが、たしかに「湿つた龍」っぽい気がする。勿論、そんな句いは嗅いだことがないけど、虚の共感というヤツですよ。きつと本シメジならば、さらに「龍」っぽいんじゃないかなあ。

山彦へ少し残さむ湿地茸狩

まどん

収穫物を「少し残さむ」という発想があります。それは他の命と共に生きるために、小さいけれど大切な掟だからです。が、「山彦」のためにと書くことで、一句は虚の世界へと広がります。木霊としての「山彦」を思うか、海彦山彦のお話しを思うかで、一句の鑑賞も変わってきます。それがこの句の豊かさでもあるのです。

ほぐしたるしめじに木霊三三匹

佐藤直哉

こちらは「木霊」という生き物との遭遇。「湿地」を見つけてほぐしてみると、「木霊」が「三三匹」くっついてた！という発想のなんと楽しいことか。どんな形をした生き物なんだろう？と考え出すと、これだけでしばし酒が飲めるほどの詩的好奇心が動き出しますよ。

でいだらばつちの足跡の沼しめぢ茸

檉の木

茸というものが、「でいだらばつち」の世界と親和性があるのだろうと思いますが、「でいだらばつちの足跡の沼」と書くことで、「沼」という実景が「沼」に立ち上がってくるから、やはり巧い。「沼」の一字が虚実の光景を繋ぎます。

しゃかしめじ子泣き爺の簀に雨

菅茂子

「しゃかしめじ」という名前は「釈迦」を連想させつつ、「子泣き爺」という物の怪の名との取り合わせに俳諧味を添えます。「子泣き爺の簀」みたいな「しゃかしめじ」も、しとしとと「雨」に濡れているのでしょうか。

しめじ踏み砕き桃太郎一行は

初蒸気

え、そうなの？と思わず、「桃太郎」のお話を思い返してしまふような一句。この作家の想像力をもつてすれば、さまざまな昔話の中のどこに「しめじ」が生えているか、スラスラと教えてくれるはずです。

「しめじ」なんて見向きもせず「踏み砕き」、勇ましく進む「桃太郎一行は」、このあとと鬼が島の鬼たちも「しめじ」みたいに踏み砕いてしまふのでしょうか。

兄弟子の白星黒星しめじ裂く

ぐわ

食べ物になる寸前？の「しめじ」も一句。「兄弟子」の一語で、登場人物が兄弟子であること、「白星黒星」で相撲取りであること等が「一気に見えてきます。実に経済効率のよい作り方です。

「白星」の兄弟子、「黒星」の兄弟子がいる相撲部屋のちゃんこ鍋。「しめじ裂く」その手にも、大きなシメジ小さなシメジが入り混じります。「裂く」という動作もまた俳諧の味です。

姫路城みたないしめじ桐箱に

小泉岩魚

笑ってしまいました。これは間違いのない本シメジですわ。なんせ「桐箱」ですしねー（笑）。上五「姫路城」が比喩だと分かり、それが「しめじ」の見立てであることが分かつた瞬間の愉快。「桐箱に」というベタな語りも、この場合は効果的です。

あしかり 蘆刈

天

晴れわたる百年後にも蘆刈つて

優空

「蘆」という植物は、ギリシャ神話にも古事記にも旧約聖書にもでてきます。実用として、古くは蘆舟やバビルス、蘆笛、日本では葦簀、松明、肥料、燃料、食料、生薬原料、漁具など、多種多様に使われているそうです。木管楽器のリードにも使われていると聞きます。

この「蘆」という植物の特性を踏まえた上での「蘆刈」の作業。丁寧に「蘆刈」の現場を再生した作品もあれば、「蘆刈」の光景を広くと表現した作品もありました。

その中で、掲出句は、時空を往復するかのような発想が特徴。これはまさに人類の文化に深い繋がりを持つ「蘆」ならではのものではないかと思っています。

上五「晴れわたる」は現在の空の状況であり、上五で切れていると読むのが気持ちいいですね。ただ意味上では「晴れわたる百年後」と読むことも可能ですから、頭上の青空が「百年後」の青空へつながっていくかのような印象を醸し出します。

「百年後にも」という一種散文臭い助詞でつなぎつつも、下五「蘆刈つて」と蘆刈の光景が出現したとたん、読み手の意識は「百年後」の未来を思いつつ、神話の時代から「蘆」を刈り続けてきた人類の歴史へと思いが広がります。

「晴れわたる百年後にも蘆刈つて」は人類の普遍的文化を匂わせつつも、今、「蘆」を「刈る」人々

地

の頭上にある青空の美しさを描きます。壮大なイメージを内包した見事な「蘆刈」の作品です。

蘆を刈る音しやくしやくとあをびかり

鈴木牛後

「蘆を刈る音」を表現する「しやくしやく」というオノマトペは、いかにも切れ味のいい刃物の音。「あをびかり」という色を含んだ描写もまた鋭利な映像。読者の耳と目へ伝わるリアリティ。中五の平仮名表記もまた音と色を率直に伝える印象です。

蘆刈られ空は九尺深くなり

山香ばし

「蘆」が刈られた「空」を詠んだ句はたくさんありましたが、「九尺」という具体的な数詞がよいですね。「九尺」は、まさに「蘆」の背丈。「空」が「深くなり」という感覚に、この数詞がささやかなリアリティを添えます。

果てしなき下総の空蘆を刈る

柝の音

数詞が「空」の深さを伝えるとすれば、地名が「空」の広さを表現することもできるのですね。特に、「下総」は利根川水系を抱く土地。「下総の空」と「蘆を刈る」によって、一句の世界に奥行と高さが生まれます。

蘆刈や蘆の動けるひと所

ひろろ

似たような発想、似たような光景を描いた句はほかにもありましたが、「蘆刈や」と上五に置きつつ、蘆刈の人物を一切描かず、「蘆の動けるひと所」とその状態だけに焦点を絞った点を評価しました。「蘆刈」の人あるいは舟に対する、作者の位置がはっきりしますね。

猛禽の影蘆刈る鎌をよぎりけり このはる紗耶

この「猛禽」はさつきから何度も頭上をぐるぐると回っているのでしょうか。「蘆刈る鎌」の動き、一瞬よぎる「影」。ゆうゆうとした動きなのか、獲物を見つけての鋭い降下か。読み手の想像も膨らみます。下五「よぎりけり」の描写からして、前者かと読みました。

刈り芦束ね二カ所括つて立て掛ける

ボメロ親父

蘆を刈つた後の作業を、まるでマニュアルのように淡々と描くことで、一種の俳諧味が醸し出されます。特に中七下五「二カ所括つて立て掛ける」にリズムがありますね。一句に「刈り」「束ね」「括つて」「立て掛ける」と、これだけの動詞を使つて破たんしない点がベテランの味です。

蘆刈や束の重心探りつつ

てまり

これも「蘆刈」の作業の一つ。「二カ所括つて立て掛け」た、あるいは寝かせた「蘆」を担いで運ぶ作業ですね。「束の重心探りつつ」という措辞は、読者の追体験を誘います。特に「つつ」と、言い切らなかつた点も効果的です。

孵らざる卵水色蘆を刈る 玉虫虫改めせり坊

「蘆」を刈る作業を進めていくと、そこには、さまざまな生き物の痕跡も目にします。水鳥の古い巣に遭遇することもあるでしょうし、「孵らざる卵」を発見することもあるでしょう。「孵らざる卵」の「水色」に不憫を感じつつも、「蘆を刈る」手が止まることはありません。

刈り残る蘆がくすぐる若い夕陽

初蒸気

「刈り残る蘆」で日中の作業を想像させ、「蘆」

波郷忌

はきょうき

が「くすぐる」という擬人化でささやかな謎を投げかけます。「若い夕陽」という一種の擬人化も成功しています。少し早めに「刈る」作業を終え、括った蘆束を運び始めるのでしょうか。「若い夕陽」の色合いや、視界の広がりも見えてきます。

野火止の狭き水路の蘆を刈る

糖尿猫

「野火」も季語ではありますが、「野火止の狭き水路」という場所を伝えるための言葉ですから、季語としては脇役になりますね。「蘆を刈る」光景としてなるほどこんな場所もあるのかと、納得させられました。どんな場所にと？と発想することでも、リアリティとオリジナリティを手に入れられるのですね。

蘆刈りて傷は蘇芳に乾きゆく

理子

「蘆刈」は刃物を使う作業ですから、「傷」は付きものでしょう。「傷」の色を「蘇芳」と表現した点に惹かれます。「蘇芳」は赤紫ですが、今昔物語では凝固しかけた血液の色表現として使われてもいるようです。下五「乾きゆく」も、いかにも労働の途中の傷らしい描写です。

我らこそカインの子なれ蘆を刈る

谷口詠美

「カイン」とはアダムとイブの子でもあります。兄がカイン、弟がアベル。カインは嫉妬のために弟を殺し、人類最初の殺人者となります。「蘆」は、神話にも度々でてくる植物。「カイン」という名との取り合わせに違和感はありません。「我らこそカインの子なれ」という認識は、自嘲とも自戒とも読み取れます。「カイン」とは、ヘブライ語で「鍛冶屋、製造者」を意味するのだそうです。読めば読むほど言葉と言葉が深くつながっていることに気づく、重厚な作品です。

天

火の息に眼鏡曇らす波郷の忌

魚ノ目オサム

忌日の季語の難しさのために息をついた今週。石田波郷らしさをどう切り取るのか。彼の作品をふまえた句もたくさん読ませてもらいましたが、それもまた、忌日の季語を使う上での有効な手法だと思っています。

もう一つは、忌日の人物の風貌や性格や生涯を匂わせる方法です。石田波郷（1913年（大正2年）3月18日～1969年（昭和44年）11月21日）の風貌の特徴は、眼鏡と長身。招集を受け華北に駐留し、左湿性胸膜炎を患い帰還。その後は、死ぬまで手術と入院をくりかえしつつ、俳人としての仕事を続けました。掲出句の「火の息」「眼鏡」はまさにそんな波郷の横顔を表現するための言葉でしょう。

「火の息」とは、熱のある身の息。我が身からでてくる「息」なのに、その熱さに驚いているかのような言葉です。「火の息」を吐きながら「眼鏡」を拭っているのでしょうか。波郷自身が、「眼鏡」の汚れを拭き取っては句を綴る姿が見えてきます。

とはいえ、この句の人物を石田波郷と限定して読まねばならぬというわけでもありません。自分自身が「火の息」をハッハツとかけて「眼鏡」を拭いている。そういえば、今日は石田波郷の亡くなった日「波郷忌」であることに気づいた、と読んでもよいわけです。

波郷という人物を描きつつ、普遍的な読みも有

地

波郷忌の仰臥思はぬ骨の鳴る

希望峰

「波郷忌の仰臥」ですから、自分自身の仰臥と読むのが妥当でしょう。今日は波郷忌だなおと思いつつ、何気なく「仰臥」すると、体のどこかの「骨」が思いもよらず鳴ったということです。そのささやかな「音」が「波郷」の辛苦を思い起こせる。俳人にとつての忌日の季語はそういうものなのだなあと、改めて感じ入る次第です。

波郷忌の日時計となる薬瓶

スズキチ

枕辺のテーブルの同じ位置にいつも置かれている「薬瓶」。仰臥した視線の端に、「薬瓶」の影が見えます。それが「日時計」のように時を移していくのです。「日時計となる薬瓶」の影のみを見つめて過ぎる一日一日の切ないこと。「波郷」もまたこのように「日時計となる薬瓶」を見つめていたに違いないという思いが、一句に成りました。

波郷忌の鉛筆錐の如く削ぐ

めいおう星

この句も「波郷忌の○○」と続いて、モノがでてきます。「波郷忌の鉛筆」といわれると、俳句を記すための鉛筆に違いないと思います。「鉛筆」を「錐の如く削ぐ」行為は、己の中でかたちを作り始めている句をゆつくりと練る時間も想像させます。「鉛筆」を削るように、句の言葉を削ぎ落とすつつ、

作品が次第に結球していくのです。

波郷忌の呼気に湿りてゆく硯

Y音絵

こちらは「波郷忌の呼気」です。病人の呼気だろうかと思わせるのが、の季語が持つ連想力。「呼気に湿りてゆく」と続く展開の果てに「硯」が出てくる意外性にハツとします。墨を擦る度に、ぐつと顔が近づく。丁寧にゆつくりと擦っているのでしょう。平常心の静かな「呼気」を思うか、病の身の熱ある「呼気」を思うか。「波郷忌」という季語の力がさまざまな方向に想像を誘います。

同時投句「水槽の底のあをぞら惜命忌」「波郷忌や砂糖のやうに入江に雨」にも心惹かれました。

波郷忌や手紙に慣れぬ詩を書けば

田中憂馬

「波郷忌や」で切れる型の作品です。書き出した「手紙」に、がらにもなく「詩」のようなものを書き付けている自分がいるのです。「手紙に慣れぬ詩を書けば」のあとの余白を、どう読み取るか。書き留めたその詩には、どんな思いが込められているか。「波郷忌」という季語の力か……病臥にある人物が妻や子 pensando 書き付けた「詩」ではないかと思われてなりません。

波郷忌やみどりの夜の詩は淡し

土井探花

季語「波郷忌」は、俳人石田波郷の病臥の生涯を否応なく思わせますが、この句の中七下五「みどりの夜の詩は淡し」は、美しい思いに溢れている詩句です。「プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ」という波郷の句を念頭においての一句だと思われませんが、書き付けられた「詩」を「淡し」と語るところに青春性も読み取れます。

二音残し止む波郷忌のオルゴール このはる紗耶

「波郷忌」という季語を中七にもつてくるのは難しい技。それを軽々とやってくれるのが、この作家の実力です。「二音残し止む」という描写のリアリテイ、それが「波郷忌のオルゴール」であるよと意味が続いていくと、この「二音」がまるで残した二児への思いであるかのような心持ちになります。

波郷忌や水とグラスに灯はわかれ

すな恵

「水とグラス」は、枕頭に置かれたガラスの水差しではないかしらと思うのも、季語「波郷忌」の連想力。勿論、病室に限定して読む必要はありませんが、「水とグラス」に映り込む「灯」が、違う質感をもつて揺れていることに、心を動かす感性に共鳴します。同時投句「波郷忌やをぐらき昼の雲に金」にも心惹かれました。

波郷忌の桃の缶詰今日開けよ

トボル

病院のお見舞いに「缶詰」やバナナを持っていた時代もあったなあと、しみじみ思い出します。お見舞いにいただいた「桃の缶詰」を、さあ「今日開けよ」、妻も子どもたちも見舞いに来てくれた今日。波郷一家のほのぼのとしたシーンを見せてもらえたかのような一句でした。

第158回 2016年12月5日週掲載

風邪

かぜ

天

風邪喰うて我百貫の無用者

93 kgのプツコラ

前々回の「葦刈」、前回の「波郷忌」が難しす

ぎると愚痴をこぼしていた皆さん。ならば、誰でも知ってる「風邪」という季語はいかがでしたか。誰もが経験したことのある季語には、類想というトラップが大きな口を空けて待っている。今回は是非「並選」を丁寧に読み、自分なりに類想を分析してみよう。

さて、そんな今週の兼題「風邪」の天に推したのはこの句。「風邪」を「喰う」という表現、大袈裟だなあと思ったとたん「我百貫」という数詞と共に、巨体が出現。「百貫」の体ならば「喰う」という動詞も腑に落ちるよと思ったとたん、下五の「無用者」という自嘲。なるほど、そうきたかと笑えました。

「好き嫌いのないのはいいが、なんでもかんでもバクバクバク喰いやがって、とうとう流行の風邪まで喰いやがった！」なんて家族に憎まれ口を叩かれているのでしょうか（笑）。風邪の身でありながら、食欲だけは落ちない「我百貫の無用者」。今日のところは、ゴロゴロ寝ているしかないようですな、ははは！

地

風邪の熱吸うて重たき夜着の花

とおと

同じ「風邪」でもどことなく艶っぽいのは下五「夜着の花」という表現のせい。寝返えりを打つのも重い体。我が熱を「吸うて重たき」という中七の描写にもリアリティがあります。同時投句「風邪の耳いま海溝を墜ちゆくか」の、比喩への肉体的共感。

市民の風邪蔓延る市民窓口課

めいおう星

一転して軽やかな切口の一句。「市民課」は市民の皆さんのための「窓口」ですが、そこには市民

の皆さんの「風邪」が蔓延っています。「市民窓口課」は全員が白いマスクで完全防備。ちよつと皮肉な光景、笑えます。

風邪引きのるつぽの中や葉待つ

あすなろ

似た発想の句はたくさんありましたが、「風邪引きのるつぽ」がどこなのか?という答えが、「下五」葉待つ」で見えてくる構造に工夫があります。中七「中や」は、ため息のような「や」ですね。

喉彦の奥は真つ暗風邪宿る

いもがらぼくと

「喉彦」は喉ちんこ。あーんと口を開けて、扁桃腺の腫れ具合を見ているところなのでしょう。この「奥」の「真つ暗」などところに「風邪」が宿っているのだなあとという思いに共感しつつ、「喉彦の奥」の「真つ暗」な部分に興味を持つのが俳人なのだなあとも思います(笑)。

赤黒き風邪の臭ひの沈む部屋

クズウジュンイチ

「風邪の臭ひ」という表現にもリアリティがありますが、それに「赤黒き」と色の感覚的比喻をもつてくることで、さらなるオリジナリティが生まれます。「沈む」という動詞もまた、「風邪」の現場を生々しく読者に想起させます。

風邪の子にむつかしい物たのまれぬ

くらげを

すっかり食欲をなくしている「風邪の子」に、「なんでも好きなもの、食べられそうなものを言つてごらん」と声をかけたのでしょうか。まさかそんなもの?!と困惑してしまう「むつかしい物」を頼まれてしまったお父さん(かな?)。その「むつかしい物」って何?とあれこれ想像させる、愉快な一句。

風邪の儘三日過ぎたるソウルかな

三重丸

ちよつと「風邪」引いたかな?と思いつながら、飛行機に乗つたのでしょうか。もつてきた風邪葉が効いているのかいないのか、「風邪の儘三日」過ぎてしまったという事実の後に出てくる地名「ソウル」は、今、大統領問題で揺れている最中。時事を含んだ面白さの一句です。

風邪の子の寝付くや北の大陸も

Y音絵

こちらは具体的な地名ではなく、「北の大陸」と大づかみな表現。「風邪の子の寝付くや」という措辞に、はろばろとした思いが広がります。「北の大陸も」の最後の助詞「も」一字が、作者の立ち位置を表現。目の前にはやつと寝付いてくれた「風邪の子」の寝息。

立ち位置と風邪こじらせて金曜日

ぐわ

こちらの「立ち位置」は会社の中の、己の社会的立場のそれでしょう。「金曜日」はウィークデーの最終日ですから、この一週間に起こった職場での騒動を思わせます。「風邪」も「立場」もこじらせてしまった「金曜日」。せめて明日明後日は、ゆっくり休んで下さいな。

四谷「蜜」のママ風邪声の早じまい

ララ点子

いろんな職業の風邪もありましたが、「四谷」の「蜜」という店の「ママ」という立場が面白い一句。こんな時間に準備中の札?といぶかしく思つて声をかけた常連客でしょうか。ごめんね、今日は早じまいさせてもらうわ、というその「風邪声」。ママ、ゆっくり寝て下さいな。

外国で人が死んだ、風邪が辛い

光

ニュースを見ている深夜でしょうか。どんな事故、事件であるかは一切語らず、「外国で人が死んだ」とだけ述べる冷淡さ、そして己の「風邪が辛い」という現実。読点の空白が、ニュースの世界と己の現実を隔てる心理的溝のようでもあります。

味しないメロン食して風邪の馬鹿

渡邊康之

「風邪」ひいたおかげで、いつもはお目にかからない「メロン」を食べさせてもらつてのに、そのメロンは「味しない」……という悲哀。味がしなくても黙々と「食し」つつ、「風邪の馬鹿」と啖く滑稽。身につまされて笑える一句です。

第159回 2016年12月19日週掲載

毛布

もうふ

天 行列の最後も毛布もらえるか

彩お茶子

兼題「毛布」、さまざまな場面さまざまな人物さまざまな心模様が表現できる季語でした。好きな句がたくさんありました。どの句を「天」に推すか、嬉しい悩みの今週。悩んだ末に、切実な現実をはらんだこの作品に決めました。

「毛布」という季語は、3・11以降、新しい側面を持ち始めたように思います。暖をとるための一枚の「毛布」が生き死にを決定する事実、現代人はおののきました。支援物資として「毛布」を送る句、「毛布」が何百枚届いた句、配る句、その「毛布」にうづくまる句、さまざまな場面を切り取った句も届きましたが、掲出句の切実さに胸を突かれます。

「行列の最後」という措辞で、評判の店の鯛焼きだろうか、ラーメン屋だろうか読み手の脳は能天気には走りますが、その後に出てくる「毛布」の一語にたじろぎます。たじろいだ後で、助詞「も」の意味にハッと気付くのです。

「行列の最後」に並んでいるのは、作者自身でしょうか。「最後」の人物をじつと眺めていると読むこともできます。のろのろと進みつつ短くなっていく列。はるか前方に堆く積まれていた毛布の山はどんどん低くなつていきます。列と山とを見比べながら、「最後も毛布もらえるか」という呟きは次第に切迫感を持ち始めます。

すでに毛布をもらった人たちは、避難所のあちらこちらに我が場所を作り始めている。ため息と不安と焦りが渦巻きつつ、読み手である私たちは「毛布」がもらえる瞬間の安堵を思い、「毛布」が足りないと分かる瞬間の落胆を思うのです。

地

避難所を花野めきたる毛布かな

くらげを

「避難所」の一語で場面が確定しますが、次に出現する「花野」という秋の地理の季語に、首をひねります。そして中七下五を読み通して、この比喩に合点がいくわけです。そのあたりの構成が巧い作品です。配布された色とりどりの「毛布」は各地から届いた救援の毛布でしょうか。まるで「花野」のようだよという一見美しい比喩が、尋常ならざる光景を描きます。

シベリア上空軽き毛布とシャンパンと

雪つさぎ

一転して、優雅な「毛布」です。「シベリア上空」という場所、「軽き毛布」という上質なイメージ

に「シャンパン」がさらなるお洒落感を添えます。「く」という並列は、さらに続くものがある印象を与える型です。高級なチーズ、ゆつたりとした革の座席、選べる映画等々。

洗礼の王女をくるむ毛布かな

朶美子

こんな「毛布」も有り得るなあと、納得。「洗礼」の一語が状況を、「王女」の一語が人物を語りますので、その周りの様子もおのずと想像ができます。「毛布」にくるまれた「王女」の肖像画を見せていただいたかのような高潔にして優美な作品です。

毛布掛け歌ふアイヌの星を火を

佐藤直哉

野外の「毛布」の句も色々ありましたが、「アイヌ」の一語が力強い一句。「毛布掛け歌う」という動作が立て続けにでてきた後に、「アイヌの星を火を」と畳みかける調べが巧いですね。焚き火を囲んで歌っている光景を思い浮かべました。

泣き虫な毛布をなだめしづかな丘

とおと

「毛布」も「布団」も冬の季語です。泣きたい時に潜り込んでしまう……という発想の句はどちらの季語においても多々ありますが、この句は「毛布」が動きませんね。下五「しづかな丘」という表現が秀逸。「毛布」の手触りまで伝わってきます。字余りの収め方も静かな余韻となつて。

わたくしを発酵させる毛布は黄

中原久遠

「毛布」の表現として「わたくしを発酵させる」の詩的リアリティに触発されます。「発酵」の饅えた句いは、「毛布」の中の性的なイメージにもつながります。「黄」という色もまた「発酵」の一語をさらに匂いたたせます。

いつのまに爪は毛布と睦みあふ

Y音絵

「いつのまに」というぼんやりとした時間の気分が、「爪は毛布と睦みあふ」という詩語に寄り添います。「毛布」に絡む「爪」、「毛布」をなぞる「爪」一人の「毛布」か、男女がクスクスと睦み合っている「毛布」か、想像は広がっていきます。

薔薇の毛布や佳き死へと転院す

土井探花

「薔薇の毛布」は薔薇の模様の毛布だと読めばよいでしょう。「くや」の詠嘆の後の「佳き死へと転院す」というフレーズにハッとします。「佳き死」を手に入れるために「転院」するわけですから、ホスピスへの転院だと分かります。「毛布」はそんな決意を優しく包む薔薇色、薔薇の模様なのでしょう。

つまはいまよもつひらさか毛布抱く

くさぐき

「よもつひらさか」黄泉平坂は、よみの国と現世との境界にある坂です。今、我が目の前で息を引き取った「つま」を抱く「毛布」です。「つまはいまよもつひらさか」という平仮名が、慟哭のつぶやきとなつて、読み手の心にひたひたと流れ込んできます。俳句では「妻」と書いても「夫」と書いても「つま」と読みます。

泥濘の毛布や踏めば泥を吐く

大西主計

「毛布」は本来、暖を取るためのものです。その最後は、「泥濘」の道に放り込まれて、泥水を吸わせ多少でも通行しやすくするモノとして扱われています。季語の本意からは逸脱するかもしれませんが、こんな「毛布」にも目がいくのが、俳人の習性。「踏めば泥を吐く」という措辞に、描写の目が光ります。

毛布毛布わたし猿人だった頃

カリメロ

「毛布」にくるまって、こんなことを考える人もいるのだと愉快になりました。「わたし」が「猿人だった頃」には、どうやって暖をとってたのかしら「毛布」なくても、毛が生えてたから大丈夫だったのかな！なんて、作者カリメロちゃんも笑ってるのかもしれない。

ミランダと名付けた毛布離せない

野純

自分の銃に女の名前をつけている警察官？自衛官？の話を思い出しました。我が「毛布」に「ミランダ」という女の名前をつける若き俳人。恋人の名前という匂いがしてこないのは何故だろう（笑）。こんな句を作る君は、永遠のライナス君に違いないよ！

第160回 2017年1月16日週掲載

熊

くま

天

ひつそりと熊の来てる火消壺

とおと

兼題「熊」でこんな句がでてくるとは思ってたので、吃驚しております。

田舎の古い家の土間を思いました。土間を上がった座敷には囲炉裏があり、しゅんしゅんと静かな湯気をあげる鉄瓶がかかっています。土間はそのまま台所に続いて、裏口から裏の畑に出ることができるような間取りの家……を想像させるのが、下五の二語「火消壺」の効果です。

この「熊」は、冬眠前にたっぷり食べていなかった熊でしょうか。浅い眠りから覚めてしまい、里へ

下りてきたのかもしれませんが。この「熊」に遭遇

したのは、朝餉の支度の葱を裏の畑に取りに行つて戻ってきた婆さんでしょうか。畑仕事を終え、鎌を担いで戻ってきた爺さんでしょうか。土間に誰か立っている……と思いつつ、近寄ってみると、それが「熊」だと分かる。そんな場面なのでしょう。何といつても、「ひつそりと」という上五の描写が巧い！冷たい土間に立つ「熊」の姿が見えてきますし、狩られるべき「熊」という存在がひたりとそこにある、と感じ取れます。

「熊」の足元には「火消壺」。そこに何か入っていると思つて転がしてあると読んでもよいし、暗い土間にひつそりと立つ「熊」と「火消壺」のシルエツトがあると読んでもよいでしょう。「熊」と「火消壺」の取り合わせの妙は、「熊」と人間の「ひつそり」とした遭遇を描きつつ、季語「熊」が持つ事実の一つを読者に提示してくれそうです。こんな描き方でもって、冬という季節の手触りが表現できていることにも驚いております。

地

油煙墨たらしやうに熊の出る

三重丸

「油煙墨」とは、油煙を膠で固めて作った墨です。菜種油、ごま油、鉱物性の油などを燃やして、その煤を集め、膠、水、香料などと混ぜ合わせて製造されるのだそうです。

「油煙墨」という比喻を使つて、季語「熊」を表現していますが、「やうに」の部分の注意深く読む必要があります。例えば「油煙墨たらしやうな」ならば、そのまま「熊」に掛かっています。「油煙墨たらし」みたいな色や様子の熊であるという意味になります。

が、掲出句は「油煙墨たらしやうに」ですから、

「出る」のほうに意味が掛かっていますね。「熊」の巨体がぬつと現れる様子を、まるで「油煙墨たらし」かのような不穏な迫力をもつて……と描いているわけです。「熊」という存在を、比喻を使つた一物仕立てで表現した作品。これも「天」に推したかった一句です。

熊の章立てて開拓少史かな

ぐわ

「熊」という「章」を作つてあるという意味ですから、実際に目の前に「熊」がいるわけではありません。このような季語の使い方は、季語として認めないという主義主張を持つ俳人もいますが、私はそこに季節感や臨場感があれば、季語としての機能はあると考えます。

「開拓少史」には、「熊」と闘い続けてきた開拓民たちの生きざまが記録されているのでしょう。「熊」という「章」が立てられるほどの「熊」との格闘の歴史。下五「かな」の詠嘆が読者の心に強く響きます。

熊割かれたばしる湯気と臍かな

檜の木

「熊」が腑分けされている様子を詠んだ句もたくさんありましたが、この句の臨場感に圧倒されます。「熊割かれ」で状況を述べた後の「たばしる」という動詞の選択が見事。後半「湯気」の動きや白のイメージに対して、「臍」の生々しい赤の対比も利いています。

以下は、檜の木くんの実体験談です。

●組長、長野に住んでいた時のことです。その年は夏に熊が多く出ました。夕方、下宿先に戻っていると、軽トラの荷台で月の輪熊が解体されているのに出くわしました。毛皮を剥がされてピンク

鷹狩

たかがり

腰壺の肉片温し鷹狩の朝

ぐわ

兼題「鷹狩」なんて、見たこともないし経験できはるはずもない……と困惑した人も多いはずですが、私たちには兼題となった季語を調べる手立てがあり、得た情報をもとにリアルな想像を展開する能力もあります。

まずは以下、今週の「俳句道場」に寄せられた情報を抜粋します。【昔は大掛かりでヤブや林などに潜む獲物を犬が探し上空へ追い出しました。鳥が無い上がった瞬間の速度の遅いときに、鷹匠がすばやく「やや空腹で癡狂になった」鷹を放し獲物を捕えさせました。捕えて降下した鷹は獲物の上で闘争の疲れが回復するまで休んでいます。その時に足につけた鈴で位置がわかります。ほんの短い時間のうちに、鷹匠が行き、餌を与えて獲物から引き離し回収するのです。そのために獲物を回収のために昔は何千人という勢力が使われていて（土族とか農民）鷹の鈴で位置を調べて、大急ぎで代わりの餌を鷹に与えて、獲物を勢力たちが鷹庄のもとに運んできます。鷹が捕えた獲物を主人である鷹匠のもとへ持つてくるということではありません。／砂山恵子】

掲出句の「腰壺の肉片」とは、まさにこの文章にある「鷹を獲物から引き離すための餌」なのでしょう。「鷹狩の朝」の支度が整った「鷹匠」の腰には小さな「壺」が括られている。そこには、まだ生温かい「肉片」が入っているということです。「鷹

るでしょう。暖かい湯気をあげる「ポトフ」のなんと美味しそうなことか！

日本の熊の熊なり人くさし ウェンスデー正人

こちらは「日本の国」に住む「熊」です。外国の熊は、いかにもバタ臭い貌をしますが（笑）、日本の熊は心なしか「人」っぽい貌をしているように感じるという一句。「日本の」ではなく「日本の国」という大げさな表現も味わいです。下五「人くさし」という措辞に詩的実感があります。

愉しげな猿哀しげな檻の熊 香野さとみ

動物園の「熊」に季節感があるのか？と問われると、苦しい返答にはなりますが（苦笑）、対句で表現された「猿」と「熊」の描写に肯かざるを得ません。猿山の「猿」たちは「愉しげ」に走り回っているのに、「檻の熊」は「哀しげ」に汚れているのです。冬の冷たい風を思うと、「愉しげ」「哀しげ」という対比がさらに生々しく感じられます。

柿の木を熊を説得する巡査 でこはち

一読笑ってしまいましたが、こんな小さな事件は日本各地で起こっているのだろなと思います。里に下りてきた「熊」が、梢に残っている「柿」を取ろうとしているのでしょうか。よっぽど大きな「柿の木」か、よっぽど小さな「熊」か、なんてことを詮索するのはよして、この「巡査」の困った顔を想像するだけでも愉快です。

がかった熊の腹にナイフが入れられると臓物が一挙に流れ出しました。その先は見えていられなくてその場を後にしました。ちなみに熊の肉は味噌仕立ての鍋で食べさせてもらいました。硬くて臭いに癖がありあまり美味くありませんでした。／樫の木

熊裂いて滴の形の胆を摘む クズウジュンイチ

「熊の胆」と書けば「くまのい」、「熊胆」と書けば「ゆうたん」と読みますが、この句の場合は「熊」の「胆（たん）」と読ませるのでしょうか。「熊」を裂いて取り出す「胆」は生薬として珍重されてきました。

私は乾いた熊胆の写真を見たことがあるだけです。吊るして干されたそのカタチは、たしかに「滴の形」でありました。下五「摘む」という動詞の選択もまた確か。「裂いて」「摘む」という二つの動詞のながれが、一句の臨場感を演出します。

熊ぐらい出るさ岩手の山だもの 関屋

誰かの言葉がそのまま五七五になっていた！という一句でしょうか。「熊」が出ると聞いた都会人たちが、次々に不安を口にしているのでしょうか。何を言ってるんだよ、「熊ぐらい出るさ」だって「岩手の山」なんだから。「熊」を冬の季語と認識すれば、「岩手の山」の蕭条たる枯れさも、自ずと浮かんできます。

くつくつとポトフは歌う熊の村 酒井おかわり

ロシアの「熊の村」でしょうか。北海道在住の作者ですから、近隣の光景かもしれせん。「くつくつ」と「歌う」のが「ポトフ」だという楽しい擬人化を、「熊の村」という措辞が受け止めます。外は雪原の村なのでしょう。熊たちは冬眠してい

狩の朝」が字余りになつてはおりますが、このゆつたりとした下五が、これから始まる「鷹狩」への愉しみ、期待を表現しているかのようでもあります。季語「鷹狩」について調べた内容をもとに、まるで自分が「鷹狩」に出発するのかようなりアリのティのある想像をめくらせる。これこそが、現実には体験できない季語への取り組み方。想像力の翼があれば、私たちは鷹のように悠々と時空を飛べるのです。

地

鷹匠へ鷹浮くやうに戻りけり クズウジュンイチ

兼題「鷹狩」の一語はありません。が「鷹匠」「鷹」の二語を使って「鷹狩」の一場面を活写しました。「鷹匠」の合図にしたがつて、悠揚と戻ってくる「鷹」の様子を「鷹浮くやうに戻りけり」と描写。見事な言葉の映像です。

鷹狩の鷹篝火の外に眠る

すな恵

かつて武将たちが繰り広げた「鷹狩」には、野営をしつつ何日かを愉しむという大掛かりなものもあったようです。「鷹狩の鷹に必要なのは「眠る」ための闇。「篝火の外に眠る」という描写も、想像力が生み出したリアリティに違いありません。

鷹狩に長けて戦は下手くそで

石川焦点

一読、こんな戦国武将もいたに違いありませんと納得。後世の人間の台詞か、「鷹狩」に駆り出されている勢力たちの悪口か、笑わせてもらいました。「鷹狩」「長けて」と並べたタ音、「長けて」「下手くそで」のテ、デ音が、飄々たる調を作っています。

鷹匠に樹齢のことも教はりぬ

希望峰

「鷹匠」について何かを教えてもらっている人物。「鷹匠」の修行中の後継者かもしれませんが、何か余所者の匂いがしてなりません。「樹齢のことも」の「も」が、そのような想像をかきたてるのかもしれない。

例えば、「鷹匠」を取材し、鷹の飼育について教えてもらっている中で、「樹齢」についても「教はりぬ」という場面か……と想像しました。もし「鷹匠」見習いのことを書きたいのであれば、表現は微妙に違ってくるように思います。

鷹狩やいつか獲りたき甲斐國

初蒸気

「いつか獲りたき甲斐國」には、甲斐の武田一族が勢力を張っているのでしょう。そんな家康になりきつての一句かもしれませんし、反対側に位置する上杉謙信に憑依しての呟きかもしれません。「鷹狩」の空の果てには「甲斐國」の冬の山並みが青々と続いています。

鷹狩を見守る播磨富士日和

山崎ぐずみ

こちらは同じ地名でも「播磨」です。「播磨富士」とは、高御位山。兵庫県加古川市と高砂市の市境に位置する山だそうです。かつて、この地で「鷹狩」をした戦国武将たちもいたに違いありません。播磨姫路藩の初代藩主となった池田輝政か……と思いつつ、これ以上の知識がないので、具体的人名を挙げるのはやめときます（笑）。

「播磨富士」という悠々たる地名が「鷹狩」の格調と呼応しつつ、「播磨富士日和」という後半の措辞が、心弾む「鷹狩」の日の気分を表現します。

鷹狩やその名ぶぶきの胴震ひ

めいおう星

「鷹狩」の鷹の「名」を発想した句は他にもありました。「ぶぶき」という名がなんたつてカッコイイ！ 隼でしょうか、大鷹でしょうか。ところどころに見える白い羽毛、猛々しい飛び方が想像できる名前です。さらに巧いのが「胴震ひ」という描写。この下五によって、一句は確かな映像となります。

靈異記の扉を開けて放鷹す

三輪佳子

「靈異記」は『日本靈異記』のことでしょう。奇跡、怪異、奇譚が詰まっている書物の「扉」を開けて「放鷹」するという発想に驚きます。「靈異記」の世界へと入っていった鷹は、一体どんな光景を見るのか。さまざまな善悪の報いを記した説話が収められているだけに、想像は否応なく広がります。

鷹狩やスーホーの馬ナラの犬

まどん

『スーホーの白い馬』に合うようにモンゴルの人名に使われる二文字を調べてみました。「ナラ」で「太陽」の意」という作者の情報収集。「ナラ」の一語の意味を知ったとたん、いいなあ！と思いましたが「鷹狩」は日本だけではなく、モンゴルでも行われていました。日本の季節感に合う合わない云々を気にするのはやめて、モンゴルの大地で行われた雄大な「鷹狩」の世界へと想像の翼を広げましょう。作者の意図どおり「スーホーの馬」は「スーホーの白い馬」のお話を思い起こさせますので、「ナラの犬」という言葉もまた、太陽のような「ナラ」という人物を思わせます。新しい物語が読者の心それぞれに生まれてくる作品です。

鷹狩や砂漠の王はまだ五歳

ほうじ茶

「鷹狩」はアラブの国でも行われていたようです。「砂漠の王はまだ五歳」これだけの言葉で、知らない国のある物語が立ち上がってきます。「まだ五歳」の「砂漠の王」は、亡くなった父王の家臣たちに傳かれながら、王たるべき「鷹狩」へと出かけるのでしょうか。季語「鷹狩」をはるかに超えた物語があることに気づかされた今週の兼題でありました。

第162回 2017年2月13日週掲載

山焼

やまやき

天

山焼や若草山をがらがらぼん

葦信夫

「地」選として残した句の中から、どれを「天」に推すべきかと、嬉しい悩みを毎回繰り返します。特に今回は、季語の現場には立ちにくい兼題「山焼」に対して、リアリティに満ちた句が沢山投げられていることに感嘆しました。

どのリアリティを「天」に推そうかと、真剣に悩むワタクシの脳を、変な波長のこの一句が邪魔をしてなりません。なにが、「がらがらぼん」じゃ?!と何度も投げ捨ててのですが、脳の中で「山焼や若草山をがらがらぼん」がしつこくリフレインされる。めっちゃ、迷惑な句です。

そもそも「山焼」の代表選手が「若草山」ですから、それを一句に共存させるのは、いかにも凡人的発想。言葉の無駄遣い路線まっしぐらです。そんな予定調和の前半を大きく裏切るのが「がらがらぼん」の一語(?)。ただの擬態語だと思ったら、ちと違っていました。

デジタル大辞泉によると『くじの入った箱を振ったり回したりして、くじを振り出す音から』

くじ引きで決めること。また、すっかり入れ替えること。組織の人員配置などを最初からやり直すことにも用いる。とあります。なるほど、ちゃんと意味があったのか。

有名な「若草山」の「山焼」は、山を「がらがらぼん」とすっかり新しくすることなのだ、という詩的定義。「山焼や」と打ち出しつつ、読み終わってみると、焼き終わった「若草山」の光景が浮かんでくる。それは「がらがらぼん」というへんな言葉の力なのでしょう。

さらにワタクシの妄想を導いたのが、童話「三匹のがらがらどん」への連想。「あるとき、やまのくさばで ふとろうと、やまへ のぼっていき ました」という三匹の山羊たちが、若草山に萌える草を食べにいくかのような想像を、ワタクシの脳が勝手に楽しんでしまいました。

そんなこんなで、このような句を「天」に推してしまった事実をお詫びしつつ、以下に並ぶ「地」の作品のリアリティをたつぷりと味わって下さい。

地

山焼やけふは風神留守と言ふ

むじじ

「山焼」において風向き、風の強さは、必要欠くべからざる条件。ところが「けふ」は「風神」が「留守」をしているのではないかという、穏やかなお天気。まさに「山焼」日和だよという一句です。「風神留守と言ふ」という伝聞の表現が、佳い味わい。

稜線を縫れ山火の波がしら

とおと

「山焼」の傍題が「山火」です。「稜線を縫れ」

から始める語順が巧いですね。さらに「稜線を縫れ」ているのが「山火」だと分かった瞬間の、映像の確かさを補ってんするのが下五「波がしら」の一語。映像化のお手本のような作品です。

山焼や大地の黒も蒼く若く

93 kgのブツコラ

「山焼」の現場を、色で描くというのも一つの発想だなと感じました。「大地の黒も」は、よくある表現ですが、その「黒」をよくみると「蒼」にも見えるという感覚が瑞々しい。「蒼く若く」と畳みかける表現もまた、鮮やかです。この若い大地から、新しい芽吹きが生まれます。

山焼の本部見下ろす開拓碑

GONZA

「山焼の本部」は裾野のほうに置かれているのでしょうか。山頂近くに建つ「開拓碑」は、かつてこの地を開いた人たちがいたことの証です。毎年行われる「山焼」は、豊かな山となった事実を象徴する行事でもあるのでしょうか。「見下ろす」の一語が視界の広がりを表現します。

山焼の前線黒く囲む沼

月之道

山の中腹にある「沼」でしょうか。「山焼の前線」という表現が面白いですね。「前線」である火が、この沼の周りを丁寧に焼いていきます。「黒く囲む」のあとに「沼」の一語がでてくる語順が、映像を印象的に立ち上げます。暗く濁った沼でしょうか、春の空をとんとと移す沼でしょうか。

山焼や無線応答ぼつと消ゆ

すな恵

大規模な「山焼」となると、互いに無線で連絡を取り合いながら、火の向き、強さをコントロールしていきます。その仲間からの「無線応答」が

切れる瞬間、過ぎる不安。「ぼつと消ゆ」のあとの空白にリアリティがあります。

焼き尽くし坊主の札のやうな山

トボル

「山焼」という季語を解体して使う技についての評価は分かれるとは思いますが。(つまり、この書き方だと火事で焼けたとも読めるという意味において。)とはいえ、「坊主の札のやうな山」とは、まさにおっしゃる通り!という納得。花札のシンブルかつ個性的なデザインは、つくづく日本の宝だと思うのですよ。

二回り小さく山を焼き終へる

かをり

これも実感ですね。一回りではなく「二回り」というのがリアル。「山が小さくなる」ではなく、「小さく山を」という表現が巧い。「焼き終へる」という措辞に、安堵があり、その措辞の余白もまた季語「山焼」の本意の一部ではないでしょうか。

山焼の慰労の指の浮腫みけり

とうへい

「山焼」を終えての「慰労」です。大仕事である「山焼」を終え、やれやれと囲む「慰労」の輪の中に、ふと「指の浮腫み」に気づくのです。己の「指」でありながら、今、気づいたという小さな発見が「浮腫みけり」という措辞であり、「山焼」の日の肉体的実感でもあります。

山焼に乗じて走る人拐い

理酔

「山焼」の日には、必ず誰かがいなくなる。神隠しに遭うのか、「人拐い」に攫われるのか。「山焼」の火、熱にゆらく枯草、吹きあがる熱風、男たちの声、走る人。「山焼に乗じて」からの展開の意外性が、一種の奇譚となつて読み手の脳に雪崩れ込

んできます。

第163回 2017年2月27日週掲載

蜂

はち

天

怒り来て縦に割れたる蜂の口

クズウジュンイチ

「蜂」のいる様々な光景、様々な取り合わせを築き上げて挑んだこの句に圧倒されました。仕立てに挑んだこの句に圧倒されました。

「蜂の口」なんぞというものをしげしげ見たことはないのに、「怒り」の感情に支配された「蜂の口」が、カット「縦に」割れ「襲い掛かつてくるCG映像が、我が脳内で生々しく再生されることに驚きました。一匹の「蜂の口」が大写しとなるその背後には、同じように「縦」に割れた「口」を開けて、怒る蜂たちが押し寄せてくるのです。怖い、実に怖い!

この生々しさを作り出しているのは、語順の巧さ。「怒り来て」で巨大にして禍々しい感情が、こちらに向かつて押し寄せてくる緊迫感を作り、さらに中七「縦に割れたる」という謎の言葉を積みかけられると、読み手の心は不穏に揺れます。最後に「蜂の口」がいきなり出てくる。クローズアップの画面が眼前に押し寄せる。これが、恐怖を作り出す仕掛けとなつていくのです。

いてるそばから、また怖くなつてくる迫力の一物仕立て。この手法は、とにかく観察するしかないのですが、「蜂」をここまで接近して眺め続けることができることそのものが、才能に違いないと確信します。

地

足長蜂飛ぶとき足の無心なる

樫の木

「蜂」という生き物の部位を丁寧に眺めようとする時、私たちの眼はぶらんと垂れた「足」に目がいきます。そこに着目した句も沢山ありましたが、「無心」という言葉で表現した点に創意があります。「なる」と連体形で終わっていますが、これは「飛ぶとき足の無心なる足長蜂」と倒置法の表現として読むことができます。

熊蜂の足みじかきは良き姿

井上じろ

足が無心に垂れている蜂もいれば、「熊蜂」のよう小さな足をちょこんと下げて飛ぶ蜂もいます。「足みじかきは」の後にさらなる描写を重ねたところですが、下五「良き姿」とまとめたところに、作者の愛でる心が表出。このような句の素朴な味わいも捨てがたいですね。

蜂打てば腹柔らかく瘰癧す

理酔

生きて在る姿を観察する人間もいれば、自ら打つて殺した「蜂」を観察する人もいます。「打てば」は三つの意味を持つ表現。「打ったので」という原因理由、「打つ」と「たたまたま」という偶然条件、「打つ時はいつも」という恒常条件。この句の場合は、恒常条件で読みたくなります。それによつて、「蜂」を打つ残酷が読み手の心にザラザラと伝わってくるのではないのでしょうか。下五「瘰癧す」の淡々たる報告が、ことさら生々しい一句です。

蜂球を朝から二つ見たるとは

小川めぐる@チーム天地夢遙

●スズメ蜂を集団で蒸し焼きにする、日本ミツバ

チだけが持つている対抗手段。／小川めぐる@チー
ム天地夢遙

兼題「蜂」についての様々な雑学情報が寄せられていた今週の「俳句道場」で、私が今回初めて知ったのは、「蜂球」という現象の意味。たった2度の体温差でスズメバチを焼き殺すという、ミツバチたちの生き残るすべに驚きました。

遭遇の驚きをそのまま「朝から二つ見たるとは」と書いただけなのですが、その感情を読者もそのまま受け止めざるを得ない一句。吉と出るのか凶と出るのか、そんな気持ちにもなってくる「朝」の「蜂球」です。

水飲んで静かな蜂になつてゐる

大塚迷路

「水」を飲む行為そのものが「静か」なのですが、そのさまを「静かな蜂」になつてゐるのだと定義するところに詩が生まれます。「蜂」の小さな口のかすかな動きに、「水」もかすかにかすかに音もなく波立つのでしょうか。「静かな蜂」をともにじっと見つめる時間もまた詩です。

水に浮く蜂もがき止まりまたもがく

睡花

「水」に落ちてしまった「蜂」もいます。「水に浮く蜂」で死んでいるのかと思えば、「もがき止まりまたもがく」と描写する淡々たる視線。自分の眼球に映つたものを、そのまま言葉にすることで、読者の脳内にはく同じ映像が再生されます。これぞ、俳人たる描写のテクニク！でありますね。

手術後の白き病室蜂がうるさい

ラーラ

「手術後」の「白き病室」のベッドに、作者は静かに横たわつてゐるのでしょうか。まぶしい光の中で目を覚めます。何もかもが白い「病室」は、明るい

春の日差しをさらに眩しくします。かすかに聞こえてくる「蜂」の羽音で、意識が戻ってきたのかもしれません。「蜂がうるさい」という口語の吹きが、生々しい臨場感。

斥候の蜂かきまはす空に傷

青菊

「斥候」とは、戦闘相手の敵情や地形などをひそかに探ること、そのためにさしむける小人数の兵をも意味します。蜂蜜を探しにいくことは「斥候」という行為ではありませんが、敵がいまいかどうかを探る仕事をする「蜂」だっているかもしれない、と思わせるのが詩語の力。「斥候の蜂」がぶんぶん飛び回ること、この青い「空」には「傷」が増えていくのだという発想に惹かれます。

吊り上げた廃車に蜂の進む

石川焦点

この句にも驚かされました。作者は廃車解体を生業としていますので、まさに実景なのでしょう。いや、実景でないところのような句は思いつかないですよ。

「吊り上げた廃車」の中に「蜂」が巣を作つていたのでしょう。「蜂の進む」という描写がそれを思わせます。「進む」という動詞の選択が、映像喚起力の源となつてゐます。これも天に推したかった作品の一つです。

同時投句「捨てられし車体へもぐる蜂の群れ」「フエンダーの裏に蜂湧く廃車かな」も、同じ場面を違う角度で切り取つた秀句です。

地蜂噴く発破工事の音遙か

山香ばし

この句も動詞の選択が確かな作品。「噴く」の一言が「地蜂」らしさを表現しています。そこに取り合わせるのが「発破」の「音」。遠い山で行われ

ている「発破工事」の「音」が、「地蜂噴く」というクローズアップの光景との対比となり、遠近感を作り出します。

花巻の蜂ちつと見る光太郎

佐東亜阿介@チーム天地夢遙

一句に季語と地名と人名を入れて作品を成立させるのは至難の技です。「花巻」という美しい地名は、「蜂」の寄る花を思わせもします。その「蜂」を作者自身が「ちつと見」ているのかと思いきや、下五にて「光太郎」という人物が出現。彫刻家であり詩人でもある高村光太郎に違いありません。「ちつと見る」その目は、「蜂」を彫ろうとする彫刻家の眼でしょうか、「蜂」を描こうとする詩人の眼でしょうか。美しい時間が内包された作品です。

憎しみや蜂飼うか地は病みし国

鈴木牛後

「や」という切字の効果「飼うか」という言い回しの是非について考えていたら、なんとこれは回文なのだそうです！回文だとは気づかず、に、「人」に残していた句。回文だと気づいた瞬間、とにかく驚きました。

「蜂」は、花粉の交配を司り、黄金色の蜂蜜のイメージを思わせますが、鋭い毒針や蜂球で敵を殺傷する禍々しい習性も持ち合わせます。上五「憎しみや」と強く打ち出すことは是非は、評価の分かれるところですが、「蜂飼う」という行為は「地」に満ちる「病みし国」々に何をもたらすのか。憎しみの連鎖なのか、救いなのか。いやはや、回文でこんなことができるとは、鈴木牛後 凄い！

俳句の街 まつやま 俳句ポスト365

とは？



俳句ポスト365とは松山市が運営する、俳句の投稿サイトです。隔週で兼題（投句のお題）が出題され、結果が発表されます。また、俳句を学べる「俳句道場」などもあります。どなたでも無料で参加出来ます。

<http://haikutown.jp/>

出張俳句ポスト365 in 札幌市

2016年2月18日～2月24日

札幌市で開催された「松山の物産と観光展」。さっぽろ東急百貨店ブース内に俳句ポストが設置され上位5句には、松山市から銀鱈煮干セットがプレゼントされる企画。水曜お便りコーナーで入選句をご紹介します。《現地投句…55句》

【優秀5句】

北国の空は水色春来る	かすみそう
ぢつと待つ冬ざれの野の朱い種	武子
坊ちゃんと呼べば応ずる春の猫	ゆめみーる・ふみ
登下校全校九名息白し	おだまさ
矢絣のマドンナ美しき梅香る	順子

出張俳句ポスト365 in 松山城

2017年1月15日～1月31日

伊予柑PR事業として松山市農林水産課が主催。1月15日～1月31日にかけて松山城に特設ポストを設置、投句を回収しました。天1名（賞品…伊予柑「道後物語」10kg、地10名（賞品…伊予柑4kg）が贈られました。結果は水曜お便りコーナーで紹介。《現地投句…203句》

【天】

車窓には海伊予柑を剥く親子

竜胆

「車窓には海」という出だしで旅の情景がわかります。流れる瀬戸内の景色を見ながら、この「親子」は「伊予柑」を剥き始めます。厚ぼったい皮の手強さに挑む時間もまた、楽しい旅の一場面でありましょう。

（組長）

【地】

いよかんととけいがほしいたんじょうび

みなみ

伊予柑を賜はりこの日誕生日

松田とよ

伊予柑をまるつと貰う受験の日

ドクトルバンブー

伊予柑や夕日の前で待つ私

トミウ生徒

伊予柑や足どりはずむ城の月

河上そう太

伊予柑を積み上げ遊ぶ弟よ

伊東幸哉

伊予柑剥く才ぞ長くるや次男坊

宵嵐

伊予柑やいくつも橋を越えてゆく

佐々木美聡

伊予柑や酸いも甘いも3か月

新婚さん

伊予柑や石を拾ってポケットへ

ゆうしん

365オフ会

2017年1月7日 (in 国際ホテル松山)



▲五十嵐秀彦さんの乾杯の挨拶



今年も、まる裏俳句甲子園前夜に開催されたオフ会。今年も北は北海道から南は九州博多まで、全国津々浦々から45名のハイポニストが集いました。

乾杯は、まる裏の審査員を引き受けてくださった俳句イタック
集団Itak代表の五十嵐秀彦さん。組長の俳句に曲をつけて歌ってくれる歌手のマユミーヌさんがシークレック
トゲストとしてライブを行い、会場を盛り上げました。



▲マユミーヌさんのライブ



▲翌日開催されたまる裏俳句甲子園





生誕150年

since 2017

—— 松山から世界へ
そして未来へ ——

俳句ポスト365選者

夏井いつき プロフィール

昭和32年愛媛県生まれ。松山市在住。8年間の中学国語教諭の後、俳人へ転身。「第8回俳壇賞」受賞。俳句集団「いつき組」組長。創作活動&指導に加え、俳句の授業（句会ライブ）、全国高等学校俳句選手権大会「俳句甲子園」の創設にも携わるなど幅広く活動中。TBS「プレバト!!」俳句コーナー出演中。「NHK俳句」第三週選者、朝日新聞愛媛俳壇選者、愛媛新聞日曜版小中学生俳句欄選者。句集『伊月集 龍』（朝日出版社）、句集『伊月集 梟』（マルコボ・コム）、『絶滅寸前季語辞典』『絶滅危急季語辞典』（ちくま文庫）、『超辛口先生の赤ペン俳句教室』（朝日出版社）『夏井いつきの美しき、季節と日本語』（ワニブックス）、『夏井いつきの超カンタン！俳句塾』（世界文化社）、『夏井いつきの365日季語手帖』（マルコボ・コム）など著書多数。平成27年5月、俳都松山大使に就任。

HP

「俳句ポスト365」
PC・スマートフォンサイト



<http://haikutown.jp/post/>



「俳句ポスト365」
Facebook ページ



<http://www.facebook.com/haikupost>

しきどう 子規堂

上京する17歳まで暮らしていた子規の生いたちの家を
正宗寺境内に復元しています。当時を彷彿とさせる勉強
部屋には、子規の遺墨や遺品が展示されています。境
内には、子規の埋髪塔や、内藤鳴雪の髯塔などもあります。

松山市